１９８８年度埋蔵文化財
発掘調査報告書

１９８９

新潟市教育委員会

例　　言

1. 本書は1988年度に実施した埋蔵文化財包蔵地（周知の遺跡）発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は新潟市教育委員会が調査主体となり、文化行政課が所管した。
3. 調査で得た資料は、新潟市教育委員会が一括して保管している。
4. 本書は、前田遺跡・大藪遺跡・ツル子B遺跡を藤塚明（文化行政課課員）、茗荷谷遺跡を小池邦明（同）が記した。
5. 現地調査から本書の作成に至るまで、多くの方々・機関から指導・協力を得た。

目　　次

前田遺跡……1
大藪遺跡……23
茗荷谷遺跡……25
ツル子B遺跡……33

番号	名　称	時　代　等	番号	名　称	時　代　等
2	荒所A	縄文？・平安(石鏃・石匙・須恵)	64	上谷内A	平安？（土師）
27	赤塚神明社	平安・江戸（須恵器・銭貨）	65	病院脇	平安？（土師）
33	神山	縄文？・弥生？（石鏃・石匙）	66	上谷内B	平安？（土師・須恵）
41	大藪	平安・中世（土師・須恵・陶器）	73	荒所B	平安？（土師・須恵）
42	木山	中世（陶器）	74	ツル子A	平安？（土師）
50	屋敷浦	弥生・平安(弥生土器・土師・須恵)	75	吹荒地	平安？（土師）
51	屋敷添	平安？（土師）	76	ツル子B	――――――
53	前田	弥生・奈良・平安・中世	77	ツル子C	縄文？・平安？（縄文土器・土師）
54	茶畑	縄文？・平安（石鏃・土師・須恵）	105	—	中世？
55	ヤマサキ	縄文？・中世（石鏃・石匙・陶器）	106	—	中世？（銭貨出土地）
58	木山墓所	縄文？（石匙）	107	—	中世？
60	観音原	縄文？（石斧）			

表1　図1遺跡地名表（番号は新潟市遺跡番号）

前田遺跡

1．はじめに

前田遺跡の調査は小規模開発に伴う試掘調査で、調査地点は２カ所である。ａ地点の調査は、自営の農器具修理工場建設に伴うもので、調査対象地は新潟市山崎字屋敷浦986番地１ほかの462㎡である。３月23・24日の両日及び４月19日～22日の２次にわたり現地調査が実施された。ｂ地点の調査は、農家の農器具倉庫建設に伴うもので、調査対象地は新潟市神山字屋敷添773番地３の331㎡である。５月24～26日の間現地調査が実施された。また両地点のレベル測量は６月15日に実施された。

現地調査者は新潟市教育委員会文化行政課課員、熊谷博純・藤塚明・前谷達也・梶良成・渡辺朋和である。ａ地点の現地調査では、事業者安沢孝作氏から、埋め戻しほか多大な協力をいただいた。

なお、ａ地点は遺物包含層が検出されたが、工事による包含層への影響はないと判断され、工事着工となった。また、ｂ地点は遺物包含層の存在が確認できない状態であり、工事着工された。

2．遺跡と調査地点

新潟市赤塚地区は新潟砂丘の西南端部付近に位置し、この砂丘上に多くの遺跡が立地する。前田遺

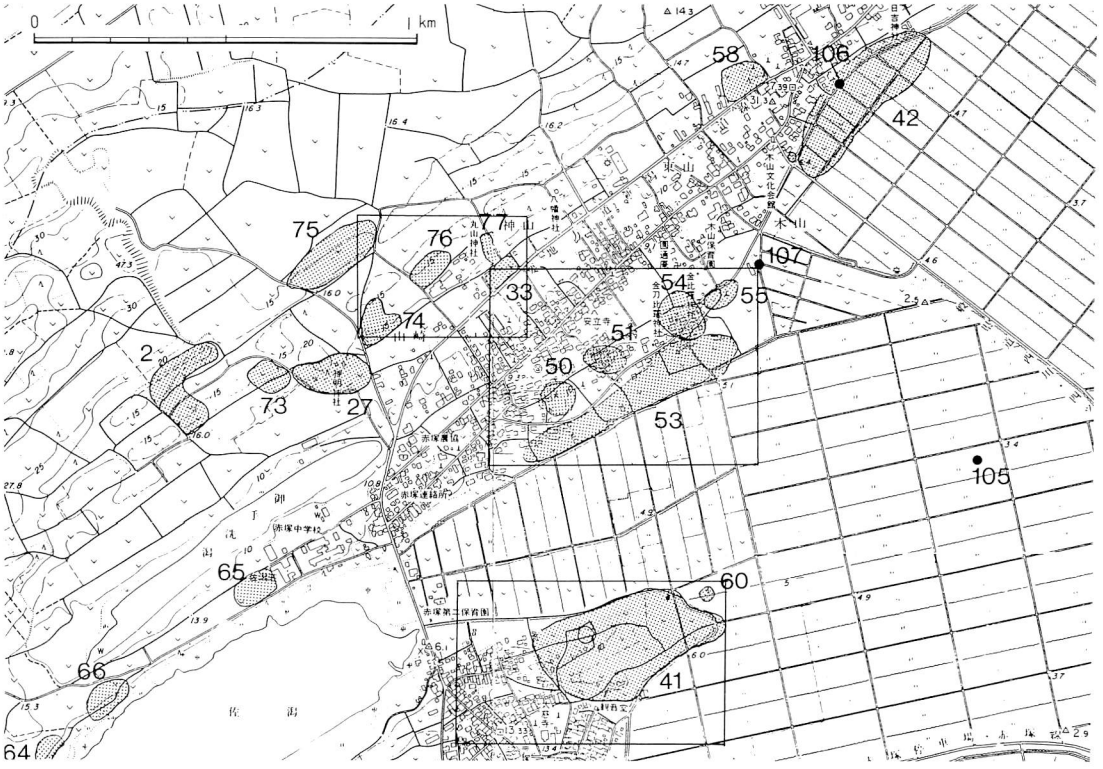


図１　赤塚周辺の遺跡（枠は図２、15、24の概略範囲）

跡は佐潟と御手洗潟の間を通って東へ延びる砂丘列東側の南斜面に位置する。同砂丘列は佐潟周辺砂丘列中、新砂丘IIａに分類される（注１）。前田遺跡の位置する付近の砂丘頂部は標高８～10ｍを測り、頂部には屋敷浦（50）、屋敷添（51）、茶畑（54）、ヤマサキ（55）の各遺跡が所在する。前田遺跡（53）はこれらの遺跡が並ぶ部分の南斜面ほぼ全域に相当し、東西650ｍ・南北100ｍほどの細長い範囲が想定されている。各遺跡の出土遺物は屋敷浦で弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器、茶畑で石鏃、ヤマサキで石鏃・石匙、前田で土師器・須恵器・珠洲・舶載磁器ほかが報告され、屋敷添は平安時代と記されている（注２）。遺跡間で時代的な重複があり、位置も接していることなど、各遺跡の実際の広がりは掲げた図２と異なるかも知れない。

図２に試掘対象地を示す。ａ地点は、屋敷浦遺跡を頂部とする砂丘の南東向斜面上、標高７～８ｍライン上にある。前田遺跡の西側に位置し、屋敷浦遺跡に隣接する。ｂ地点は、前田遺跡中央の砂丘が沖積面に接する部分、標高６ｍラインが南東向きに張り出た直下に位置する。両地点の直線距離は約200ｍである。

３．ａ地点の調査

(1) 概　　要

図３にトレンチ配置図を示す。対象地は安沢孝作氏宅に隣接する旧畑地等である。この部分はテラ

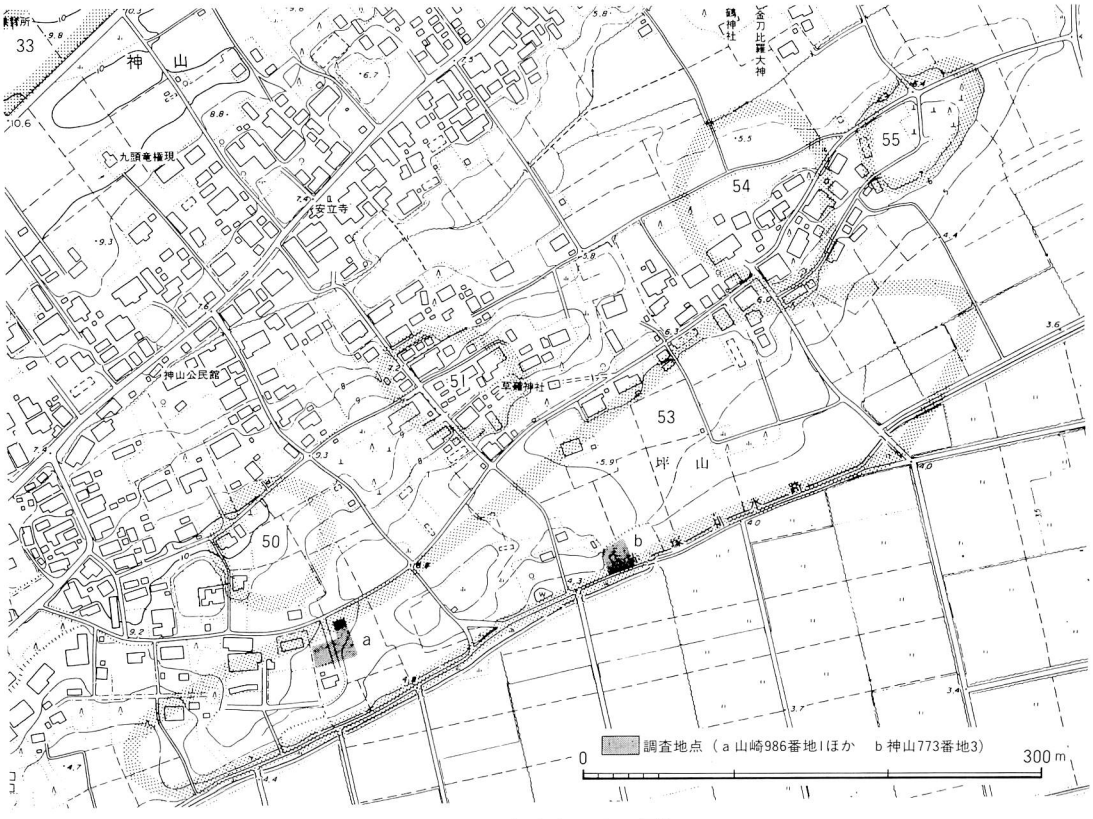


図２　調査地点とその周辺

ス状の南東向斜面で、南東側より一段高くなっている。第１～第４トレンチが１次試掘である。遺物包含層が認められ、複数の時期の遺物が出土したため、第３トレンチで確認された安定した包含層の範囲と出土遺物の層位的分離の可否を主な目的に第５～第９トレンチを設定して２次試掘が実施された。各トレンチは２×３ｍで、実質発掘面積は54㎡、試掘は総て人力によった。

(2) 層　　序

図４に各トレンチの層序を示す。同図には方向を統一するため、東西南北を反転させたものがある。第３トレンチを基本層序とした。Ⅰ層は造成用盛土の荒砂である。第１・第２トレンチライン以東では盛土はされていない。Ⅰ′層は旧表土である。畑のほか、堆肥置き場・車だまりなどに利用されていた部分があり、一様ではない。また、各所にハサ木などの撹乱穴、撹乱溝が認められる。Ⅱ・Ⅲ層は有機物を含む砂層である。色調に変化があり、各トレンチでの対応は不明確である。Ⅰ′～Ⅲ層ま

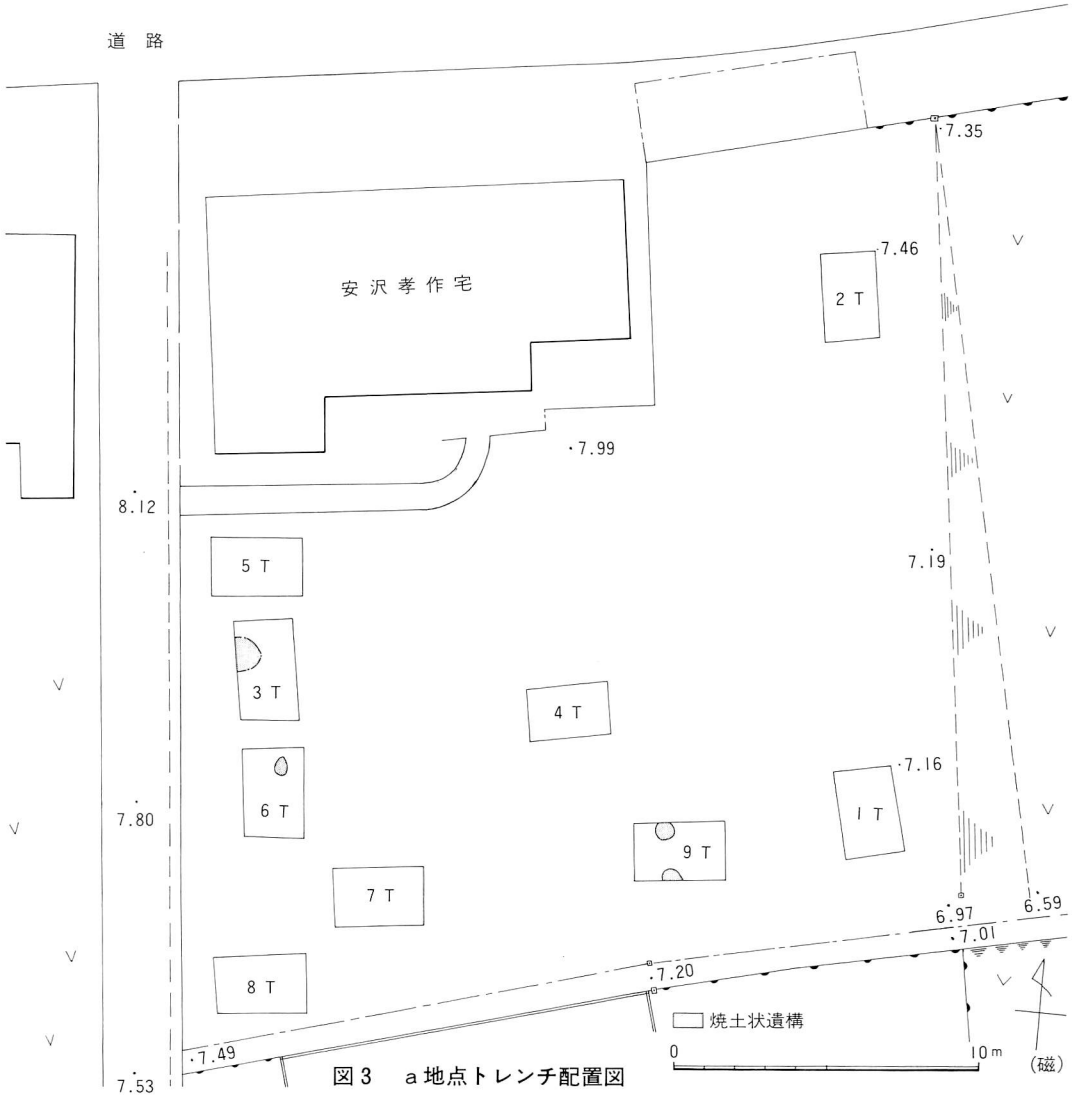


図３　ａ地点トレンチ配置図

では撹拌された形跡がかなり認められる。近現代の遺物が混じる。Ⅳ層は黒褐色砂層である。第１・第８トレンチではしまりがなく不安定である。Ⅴ層は赤っぽく見えるサラサラした砂で、遺物が多く出土する範囲では比較的明確である。Ⅵ層は焼土状遺構と仮称したもので、サラサラした均質の砂である。焼けた砂のように見え、やや固いが、炭化物等の異常を認めない。また周辺に粘土等も認められない。第３・第６・第９トレンチから４カ所確認された。Ⅳ層・Ⅴ層が主要包含層で、試掘時にはⅣ層とⅤ層の境目に良好な遺物が多いように感じられた。またⅥ層の認められる周辺には、遺存率の多い遺物が存在する傾向がある。Ⅶ層の漸移砂層は不明確である。斑点状のシミは認められない。

以上の層序は第５トレンチで基盤砂層が急激に高くなるほかは、大旨現地形に順じている。

(3)　各トレンチの状態

第１トレンチ　　安定した遺物包含層を認めない。Ⅰ′～Ⅳ層にかけて微細な遺物が出土した。

第２トレンチ　　Ⅳ層は耕作により撹拌され消失している。Ⅰ′層から若干の遺物が出土した。

第３トレンチ　　安定した包含層が１次調査で確認されたトレンチとなったため、基本層序としたが、必ずしも適当とは言えない。Ⅲ層とした暗茶褐色砂層は他のトレンチでは明確でなく、Ⅱ層ないしⅣ層の亜層とすべきである。またⅥ層は焼土状遺構と仮称したもので、自然層と同列には扱えない。なお、Ⅳ層には近現代陶磁片が数点混在していた（写真１）。

同トレンチの焼土状遺構はトレンチ西壁にかかって検出され、全体は不明であるが平面径110cmほどの円形と思われる。他の焼土状遺構と同じく、掘り込まれた形跡がなく漸移的で、遺構を埋土する覆土と異なる。断面は自然に中心が深く赤変する。本トレンチの焼土状遺構内からは完存に近い土器（114）が出土した（写真３）が、他の焼土状遺構内からの遺物出土状態は包含層と変わらない。

同トレンチからは、この焼土状遺構を中心に出土した土師器甕（111～114）と、南壁Ⅳ・Ⅴ層壁面にかかって出土した土師器甕（107～110）が集中して出土し、一括遺物と認識される。しかし、44・45などの古い様相を示す遺物も焼土状遺構確認面からの出土で、層位的出土傾向は伺えなかった。

第４トレンチ　　西壁側の一部を除き後代の撹乱穴となっており、155cmまで掘り下げた時点で他の３壁とも倒壊した。撹乱穴中から近現代陶磁とともに遺存の良い遺物が出土し、安定した包含層が存在したと予想される。焼土状遺構の有無は不明である。

第５トレンチ　　基盤層が最も高く、Ⅳ層は不明確である。Ⅰ′層から須恵器杯蓋（26）が１点出土しただけで、他の出土はない。

第６トレンチ　　堆肥置き場であったため、Ⅰ′層は油分の色調等で細分される。堆肥のシミが不規則に垂下し、異臭がする。Ⅱ層は油分が固化し異常に固い。第３トレンチの南に隣接する位置にあり、安定した包含層が予想されたため、Ⅱ層から遺物を一点ずつ取り上げ、出土レベルによる時期傾向の有無を試みた。206点まで数えたが、第３トレンチのような遺物の一括出土はなく、小破片が一様に出土した。Ⅶ層中のロクロ土師器・Ⅴ層のタタキ土師器などの出土から、レベルによる時期傾向は伺えない。なお図５のドット番号は図示の遺物番号と符合する。

焼土状遺構が第３トレンチと同層序で１カ所確認されている。極めてあいまいであるが、平面形60

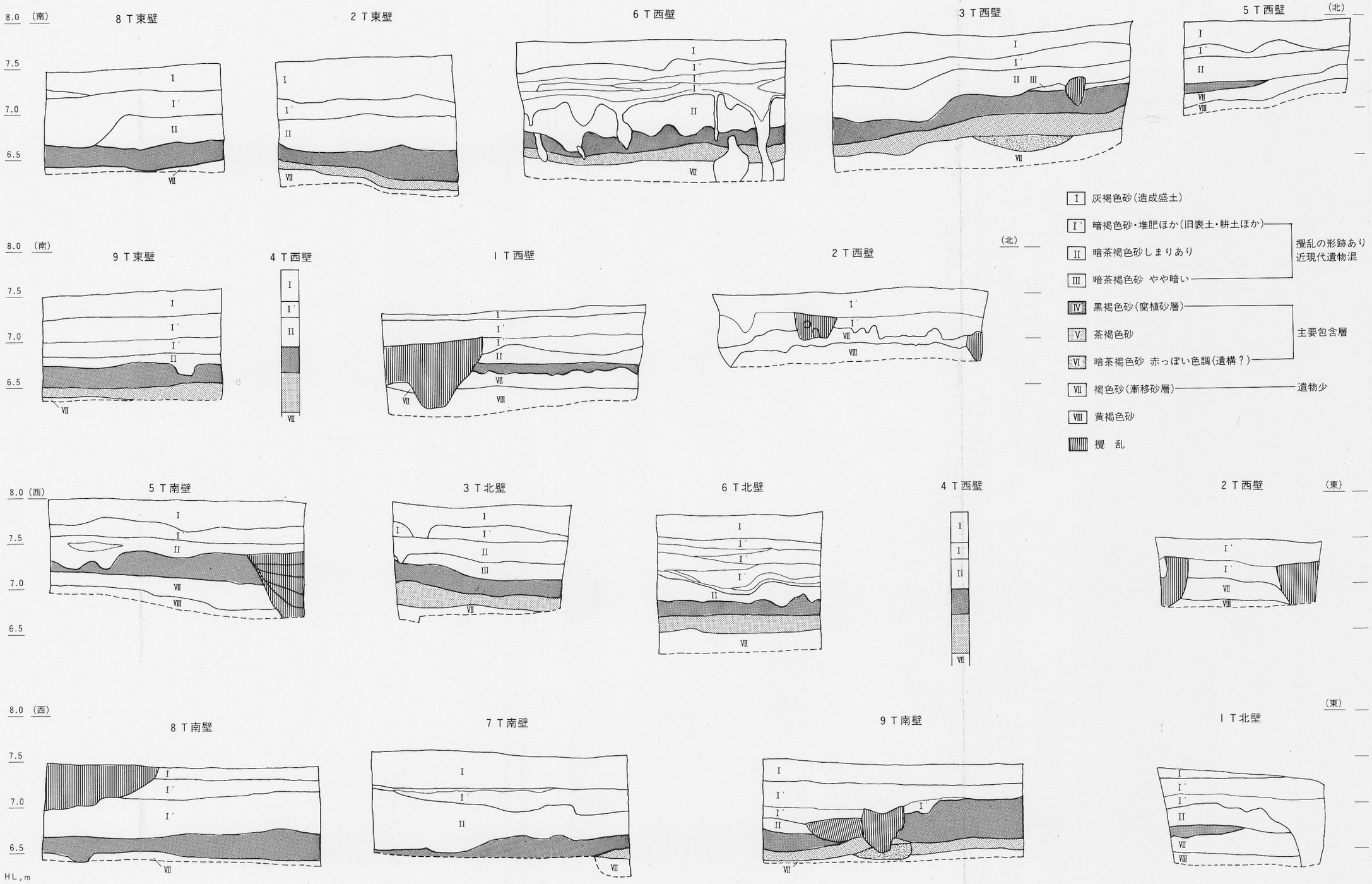

8.0 (南)
8 T東壁
7.5
7.0
6.5
I
I′
II
VII
2 T東壁
6 T西壁
3 T西壁
5 T西壁
(北)
III
VIII
9 T東壁
4 T西壁
1 T西壁
2 T西壁
(北)
5 T南壁
8.0 (西)
3 T北壁
6 T北壁
4 T西壁
2 T西壁
(東)
8 T南壁
7 T南壁
9 T南壁
1 T北壁
(東)
HL, m
I 灰褐色砂(造成盛土)
I′ 暗褐色砂・堆肥ほか(旧表土・耕土ほか)
II 暗茶褐色砂しまりあり
III 暗茶褐色砂 やや暗い
攪乱の形跡あり
近現代遺物混
IV 黒褐色砂(窩植砂層)
V 茶褐色砂
VI 暗茶褐色砂 赤っぽい色調(遺構？)
主要包含層
VII 褐色砂(漸移砂層)
遺物少
VIII 黄褐色砂
攪 乱

図4　a地点土層図

×40cmほどの楕円、中心の深さ約20cmである。内部からは土師器小形甕剝落片数点が出土しただけであるが、東隣りから全周の1/3ほど遺存する土師器小形甕（56）が出土した（写真５）。

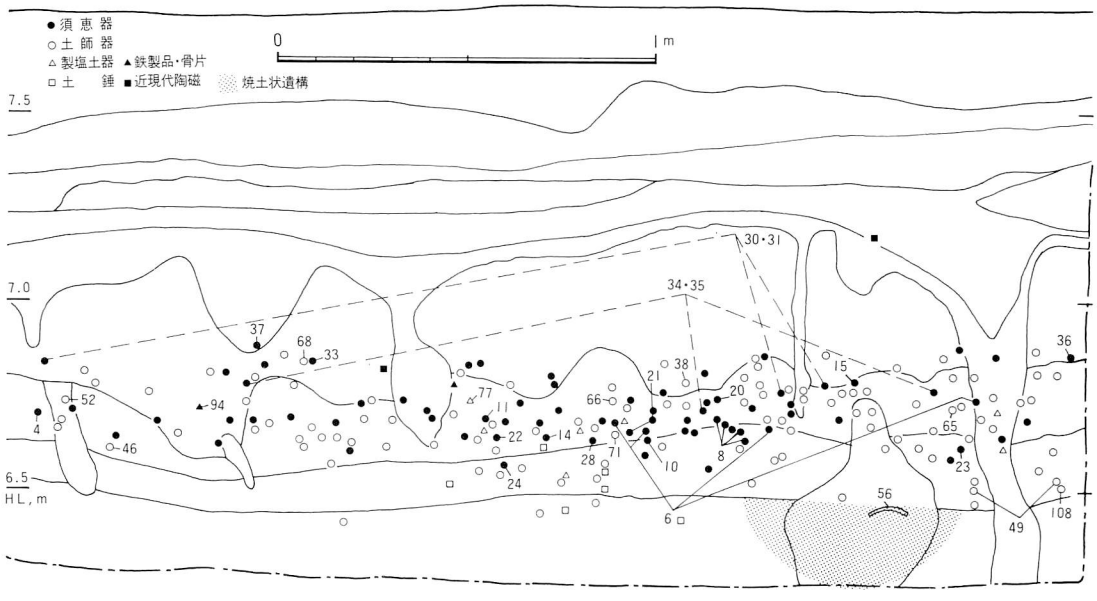


図５　第６トレンチ遺物垂直分布（西壁土層図に遺物・焼土状遺構を投影）

第７トレンチ　　堆肥置き場及び車両出入口であったため、小石等を含んで非常に硬い。図４では堆肥のシミは省略した。調査日程の都合で、土層図壁面部のみを深掘りした状態で、主要包含層は完掘していない。安定した包含層を認めるが、焼土状遺構の有無は不明である。

第８トレンチ　　安定した包含層を認めない。Ⅳ層は撹乱された形跡があり、近現代陶磁片が混在する。遺物量は少ない。なお同トレンチは、油分離槽の設置により遺物包含層まで土木工事が及ぶ部分に相当する。

第９トレンチ　　焼土状遺構２カ所と、その周辺から良好な遺物が出土した（写真４）。火を受けた形跡のある花崗岩角礫を伴っており、焼土状遺構との関連も考えられる（図６）。また弥生土器細片が２点出土した。なお、巾40～50cmの南北に走る後代の撹乱溝が包含層及び焼土状遺構の上部を切って認められ、この撹乱溝からも角礫、筒形土製品（84）などが出土している。

(4)　遺　　物

図示したもの以外には、少量のスラグ状固形物、角礫片などがある。弥生土器と明確に識別できる資料は２点だけである。須恵器は８世紀中葉と思われるものと、９世紀後半のものに別けられる。９世紀後半のものが量的に多く、若干の年代幅が想定される。土師器はハケ目調整、ロクロ調整の甕が多く、それぞれ須恵器の各時期に伴うと考えられるが、古い様相を示すものについては明らかでない。製塩土器が一定量出土し、客体的な存在とは認められない。これらは層位・レベル・位置上混在して出土した。したがって、一括出土と認識された遺物を除き、包含層の遺物として器種別に記す。なお、図示した遺物の中には、ゆがみ・遺存率などによる誤差のあるものが少なくない。

図示した遺物の出土地は表２に示す。

①　包含層出土遺物

弥生土器　口縁２点のみである。１は口縁が大きく開く甕。内面に４条の櫛描波状文を施し、外面はナデ調整。口端は細かいハケ目を施したのち、ハケ目原体と思われる工具で鋸歯状キザミを施す。黒褐色である。２は口縁が内湾しながら開く甕。内面は淡褐色でナデ調整、外面は黒褐色で口縁に２条の櫛描波状文、頚部に４条以上の櫛描沈線を施す。

須恵器　胎土に小石等を含む笹神窯に類似するものはない。

杯（３～22）　３～５のａ、６～17のｂ、18のｃ、19～22のｄに仮りに別ける。ａは器壁が厚く、ロクロナデ調整により、ロクロ成形痕をほとんど残さない。底部外面は５の中央に回転ヘラ切り痕が残るが、他は良くナデ調整される。底径は大きく安定感があり、立上りは不明確である。４・５の口縁部外面には重ね焼きと思われる変色帯を認める。８世紀中葉と思われる。

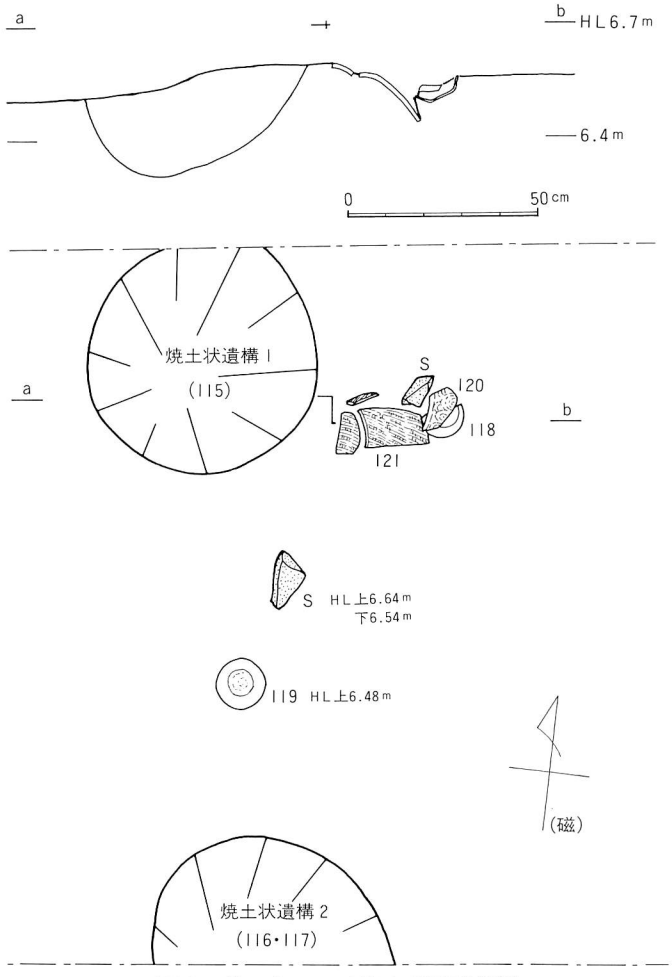


図６　第９トレンチ焼土状遺構周辺

ｂは器壁が薄く、ロクロ成形痕が明瞭に残されるものが多い。口縁直下でかるく湾曲する特徴がある。底部外面は回転ヘラ切り痕を残す。立上り部はヘラ・ナデなどで若干調整されるが、屈曲部は比較的明瞭である。重ね焼きと思われる口縁部の変色帯が多く認められる。口径は９の13.2cmが最も大きく、他はいずれも12cm台である。器高３cm、底径７cm前後で、底径の小形化は著しくない。焼成等では８のみが白色化して軟質である。内面ヌタ状の器面が多い中で、11はザラザラして白色粒が器面に多い。15には黒いシミ状の斑点が認められる。墨書の16・17は太い書体で、判読不能である。なお墨書は他に22・40・119があるがいずれも杯椀の底部外面である。７・13の内外面にはススが付着する。また12の内面はツルツルし、墨状の黒色痕を認める。ｂは９世紀後半と思われる。

ｃは身の浅い有台杯である。器壁は厚く、よくロクロ調整され古い様相を示す。全体にゆがんでいるが、口径12・高台径８・器高3.6cmを測る。胎土は精良であるが、一部に火ぶくれがある。内外面ともヌタ状光沢をおび、器面に黒色粒子が認められる。８世紀中葉であろう。

dは身の深い有台杯で、それぞれ異なる特徴を示す。19は器壁が薄く、ザラザラした器面である。推定口径13.6cmを測る。遺存部実測のため傾きが強いが、同一個体破片からはもっと直立する器形となる。20は高台径7.9cmを測る。内外面ともロクロナデで良く調整される。器壁はやや厚く、高台は広く安定している。高台接合部の杯側には、接合のためと思われる3条の溝が認められる。白色化し、やや軟質である。21・22は器壁が薄く器面がザラザラし、19と似る。21の高台径7.2cmと22の5.9cmは法量上のタイプ差であろう。22に墨書の一部が残る。19・21・22は9世紀後半と思われるが、20は不明である。

杯蓋（23～27）　図示できた資料は5点である。調整は27の例が多い。23は口内径14.7cmを測る。器壁は厚く、器高は高く、湾曲する。外面は天井がケズリで、その外周はロクロ成形痕を残す。口縁は丸く収まりながら垂下する。内面は口縁から1cmの間ロクロナデされるが、その内側は不定方向ナデ調整で、境には稜線が形成される。ロクロ調整痕を残さず、丁寧な調整といえよう。青の強い色調である。24は口内径14.2cmを測る。外面は天井部中央がナデ調整され、2条の細い圏刻がめぐり、意識的に刻まれた可能性がある。ナデ調整の外周はケズリ痕を残す。口縁は屈曲してほぼ垂直に垂下し、内面にはロクロ成形痕を残す。25は口内径12.4cmを測る。つまみは中心を若干はずれ、ややくぼむ。外面は自然釉がまだらにかかり、調整は不明である。口縁は屈曲して垂下する。内面はロクロ成形痕を残し、ツルツルにすれているが墨痕は認められない。26は天井部の破片である。内外面にロクロ成形痕を残す。つまみは大きいが低く、ほとんど取っ掛りがない。27は器壁が薄く、口縁が丸く収まる。口縁部内面返り付近を除き、軽くロクロナデされる。口内径13.2cmを測る。以上の蓋のうち、23の内面調整は他と異質で、8世紀中葉に伴う可能性がある。

長頸瓶（28）　長頸瓶の口頸部である。口縁は大きく開き、端部はつまみあげられる。器壁は薄く、内面に灰が付着する。口径11.2cmを測り、小形である。

横瓶（29～31）　体部片である。29は外面平行タタキののちカキ目、内面青海波である。白色化し軟質である。30・31は同一固体で、外面平行タタキ、内面同心円である。

甕（32～37）　32の口頸部片は精良な胎土で、大形である。33は4条以上の波条文が施された頸部外面剝落片で、大形である。34～37は体部片である。34・35は同一固体で外面平行タタキ、内面は同心円ののち部分的に平行あて具痕がみられる。36は外面平行タタキ、内面青海波である。37は外面平行タタキ、内面青海波ののち平行あて具痕である。内面は特有の光沢を帯び、低部付近と思われる。

土師器　杯椀類は須恵器に比べはるかに少ない。甕類は様々な器形・調整があり複雑である。胎土には小石等を多く含んだものがあり、須恵器と異なる。鍋は1点だけの出土である。

杯椀（38～41）　ミガキ調整とロクロクナデ調整がある。ロクロクナデ調整のものは大形の法量（41）と普通のものがある。いずれも椀器形が多いようである。38・40は底部外面回転糸切りで、38は体部外面にロクロ成形痕を残し、内面は体部ロクロミガキ、底部不定方向ミガキで成形痕を残さない。底径は5.1cmと小さい。40の内面もミガキ調整である。底部外面に墨書の一部が残る。39は底部外面も含めてミガキ調整である。41は口径17cmを測り、器壁は薄く、焼成は硬質である。

黒色処理杯椀（42・43）　微量である。42・43は内黒処理で口径は16cm、15.3cmと大きい。42は外面口縁部と内面にタール状の付着物が点々と認められる。外面のミガキはかるい。43は内外面とも入念なミガキでない。内外面にくぼみが溝状にまわる。他に内外面黒色処理の口縁部片がある。

壺（44）　1点のみである。口径15.4cm・頚径13.7cmを測る。頚部は短かく、口縁は強く外反するが、内面の体部との境以外は屈曲部がない。体部外面は細かいハケ目調整、内面はやや粗いハケ目調整である。また内面には押さえによると思われるくぼみがある。胎土は小石・砂粒を含み、色調は淡く暗い。口縁部付近が煤け、体部の一部に炭化物ないしタール状の付着物が認められる。甕の45・46とともに、器形等から須恵器杯ａに先行する時期と思われる。

甕（45～72）　識別が一貫しないが、ハケ目調整・ケズリ調整、ロクロク調整、底部の順に記す。

ハケ目調整（45～55）　頚部がくびれない深鉢状（45・46）と、くびれる甕（47～49）がある。後者は須恵器杯ａと共伴するものであろう。45は小形甕である。遺存部計側では口径が16.6cmと聞くが、ゆがみがあり実際はもっと直立するかもしれない。外面のハケ目は細密であるが、頚部以下は二次火熱で表面が剝落し、不明である。内面のハケ目は体部以下が、粗い横ナデによりほとんど残されていない。内面頚部付近に炭化物が付着する。46は45に較べハケ目が大きく、器壁が厚い。口縁は45のように折り曲げず、素直である。胎土に小石・粗い砂粒を含む。

47～49は口縁が開く器形で、47は頚部が屈曲するが他は不明である。外面はナデ調整され、内面は横位ハケ目調整である。48の細かいハケ目は明瞭であるが、太い47・49は浅い。49は大形甕で、口端面を形成する。胎土は粗い砂粒を含み、47・49には小石が混る。

50～55は体部片でハケ状工具は多彩である。内外面に施すものが多い。50の内面には、表面が剝落したその下にも同様のハケ目が認められる。52は頚部付近で、頚部横ナデの下に斜行するハケ目と、横走するカキ目を併用し、施文効果を意識させる。古い様相を示すといえよう。

ケズリ調整（64）　体部外面下半にケズリ調整を施す例に一括出土の107・108・111・114がある。111の大形、他の小形に法量は分かれる。64は内面に細かなハケ目調整を施し、恐らく非ロクロ成形部である。しかし114のロクロ成形と思われる例と、111の内面ハケ目調整どもあり、資料数が少ないため、法量による成形・調整の別や大形の器形など不明な点が多い。時期的にも単純でないかもしれない。小形甕については一括出土の項でも触れる。

ロクロ調整（56～63・65～67）　小形と、中形ないし大形に分けられる。小形の56～61は一括出土した109・110・112・113を含め、口径11～14cm程で器高は口径を下まわる。器壁は薄く、平底でロクロ成形される。底径は大きく、外面回転糸切りである。ロクロ成形を残すものが多いが、61・109のようにカキ目を施すものもある。頚部が屈曲し、口端はつまみあげられるものが普通である。つまみあげのない56のような口縁は、ケズリ調整の107・114に似る。口縁部内面を中心に炭化物が付着し、外面は二次加熱を受けボロボロになる例が多い。

中・大形は62・63の口径20cm程度と115の23cm程度の法量がある。口頚部は屈曲し、口端はつまみあげられる。体部上半にロクロ成形痕・下半にタタキ成形痕を残す。口縁部と体部内面上半はロクロ

ナデ、体部外面上半はカキ目調整される。66は体部上半、67は体部下半である。また65はタタキ成形後、不定方向のカキ目調整を施した例である。炭化物は小形甕と異なり、体部外面下半を中心に付着する。

底部（68～72）　上述の口頸部との対応が不明なものがある。68は平底で、底部外面は平坦無調整、内面におさえ痕がある。体部外面はハケ状工具で粗く調整され、内面にはロクロ状成形痕があるが小破片のため不確実である。胎土に粗い砂粒が多い。ハケ目調整大形甕の底部であろう。69・70は器壁が厚く、小石を多く含み、赤褐色の硬い焼成で、同一器種である。底部外面は平坦無調整、内面押さえ、体部外面は粗いナデ、内面ナデ調整で、立ち上りがかなり開く器形である。口頸部の器形は不明である。71はロクロ成形小形甕である。静止糸切りの疑いがあるので図示した。72は底部外面平坦無調整で、内面に指頭大の押さえ痕が多く認められる。砂質でくすんだ色調を呈し、他の土師器と異質である。時期等の異なる資料かも知れない。以上の底部片のうち、スス等は68外面に一部認めるだけである。

鍋（73）　口端をつまみあげ、口頸部外面を除き、カキ目調整を施す。体部外面には、土が固く付着している。

製塩土器　2種の製塩土器に、技法の似る筒形土製品を含め記す。

a（74～79）　内面に緻密なハケ目調整を施す。外面に輪積痕を残し、明瞭な調整を認めない点はbと同じであるが、器面・破面ともクリーム色を呈し、器壁はやや薄い。胎土には砂粒を含み、軽く、やや軟質である。破面に細かな繊が認められる。全体にbより遺存が良く、破断面の角が丸くとれることは少ない。74は口縁部片で、ほぼ直立し、大形の口径である。口端面を形成する。75～77は体部片で、かなり湾曲を示す。78は底部片で、底部外面は平坦、無調整と思われる。内面に不明瞭であるがハケ目状工具痕が認められる。底径は4cm弱と推定され、小形である。法量的に74～77とスムーズにつながるか疑問がある。aについては、類例は不明であるが成形調整等から製塩土器と考える。なお、79は細片であるが、aに類似する色調・胎土・焼成である。これも製塩土器とすれば、頸部のくびれる器形のものも存在することになるが、疑問が多い。

b（80～82）　内面に粗いハケ目状調整を施し、外面に輪積痕を残す。器壁は厚く、器面はザラザラする。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂っぽい。量的にはaより多いが、角がとれた細片となって出土するものが大半である。80は体部片で、大形の器形である。81は上端が輪積接合部で脱落した例である。接合部は指頭で内側を外面側に押し上げたように観察される。82は底部片である。底部外面は平坦で、立上り部でやや外に張り出す。底径は少なくとも10cm以上と推測され、大形である。バケツ形の器形が想定され、一般的な製塩土器である。

筒形（83・84）　84は両端が遺存しないが、上下が開口する筒形と思われ、体部有孔である。全周の1/6ほど遺存し、上下不明の一方の口縁を欠損する。ゆがんでおり推定あるが、遺存部口径14.5cm、体部径13cm弱を測る。口端は平らな口端面を形成する。体部孔は、焼成前に外面から穿たれ、内面開口部の盛り上がりはそのまま残される。孔数は不明である。全体に粗い成形で、器壁は大変厚い。外

面は不規測な輪積状痕を残し、内面に粗いハケ目状調整が認められる。内面は赤褐色を呈し、外面は二次火熱による色変があるが剝落するほど強くない。胎土に小石・粗い砂粒を含み、焼成は固い。83は同一個体かどうか不明である。孔の一部が遺存する。筒形は、製塩土器ｂと多くの類似点をもつが、製塩関係遺物かどうか本遺跡では不明である。

その他の遺物

土錘（85～92）　細形（85～91）と大形（92）がある。細形の穴は丸く、形３～４㎜を測る直線である。外形はゆがんでおり、丸い棒状工具に粘土を巻きつけて指で成形したと思われる。胎土に混入物は少ない。87・89・90は完存である。85・88・91の上端は破損であるが、86の開口部は摩擦しており、欠損後の使用と観察される。92は外径4.5cm、孔径1.5cm程度を測る残片である。孔は直線的である。胎土に小石等を含み、硬質である。

砥石（93）　半欠である。四面とも砥面使用され、端部も使われている。砥面の湾曲しない対面には鋭い溝が形成されている。石質はキメが細かく、仕上げ砥に似る。

鉄製品（94～96）　94は屈曲部で折れて出土した。錆で不明確であるが、断面径４㎜程度の円形で、ほぼ直角に屈曲する。両端は欠損していると思われ、全形は不明である。95は断面方形である。両端のうち一方は欠損であるが、他方は不明である。96は板状を呈し、欠損部で曲っている。柄と思われるが、目貫はないようである。錆は塊状になっておらず、遺存状態も良い。第８トレンチからの出土で、後世の混りの可能性が強い。

近世陶器（97）　第４トレンチ撹乱穴出土の無釉陶器である。内面に３カ所の砂目痕があり、高台畳付にも３カ所の色変部が認められる。皿か鉢であろう。高台はロクロ削り出しである。

骨片（写真６）　第６トレンチⅣ層から出土した。種は不明である。

②　一括出土遺物

第３トレンチ南壁ⅣＶ層出土（107～110）　トレンチ壁面にかかり折り重なる状態で出土した。図示以外に、大形の土師器ロクロ甕細片が１点あり、総て土師器甕で構成されるが、壁面のため全資料の出土でないかもしれない。また、焼土状遺構に伴う資料かどうかも不明である。

107・108はケズリ調整小形甕で同一個体と思われるが、遺存部実測のため図上で径が合致しない。口頚部は屈曲が明確でなく、口端のつまみあげもない。上半部はロクロ成形、ロクロナデ調整と思われる。体部下半は外面がナデ調整ののちケズリ調整、内面がナデ調整され、成形痕を残さない。底形は６cmと小さい。外面は平坦で、無調整ないしナデ調整である。砂っぽい胎土で、色調は赤が強い。体部内面下半に炭化物が付着する。なお、本例には第６トレンチＶ層出土片が接合した。109・110はロクロ成形・ロクロ調整小形甕である。110は底径が8.8cmと大きい。外面回転糸切りで、ばってんのヘラ記号がある。108と110では底部が基本的に異なる。

第３トレンチ焼土状周辺出土（111～114）　111～113は焼土状遺構直上から出土した。他に製塩土器ａの細片がある。114は焼土状遺構からほぼ倒立した状態で出土し、直上にも同一個体片が認められた。また第６トレンチⅠ´層出土の破片が接合した。製塩土器細片を除けば、総て土師器甕で構

成される。

111はケズリ調整大形甕である。外面はケズリ調整後、上半にカキ目状のナデ調整が施される。内面は横ナデで、粗いハケ目がわずかに残る。ナデはロクロナデであろう。胎土に小石・粗い砂粒を含み、内面の一部に炭化物が付着する。112・113はロクロ成形・ロクロ調整小形甕で、同一個体と思われる。112は口縁に抉り込みの一部が施された部分片で、注ぎ口となるかもしれない。113は底部外面回転糸切りで、体部外面は二次火熱で器面が剝落し調整は不明である。114はケズリ調整小形甕である。頸部は屈曲し、口端はつまみ上げられない。内面底部から体部下半にかけてロクロと思われる渦巻状の成形痕を認める。外面体部下半はケズリ調整で、器面は荒れている。上半のナデ調整は荒い。底径は6cmと小さく、底部外面は平坦、無調整ないしナデ調整である。胎土に小石・粗い砂粒を含む。

第9トレンチ焼土状遺構周辺出土（115～121）　1号遺構からは115の小破片とロクロ土師器小形甕細片が出土した。2号遺構からは116・117が出土した。118・120・121が一括出土で、他に須恵器杯b2点・ロクロ土師器小形甕1点の細片がある。1号遺構に伴うと考えられる。119は底を上にして完存で出土した。付近から115と同一個体と思われる破片が出土した（図6）。土師器甕が主体でなく、須恵器と火を受けた形跡のある花崗岩角礫を伴う点で、他の一括出土と異なる。

115はロクロ土師器大形甕である。過半はⅣ層出土である。116・117は同一個体ロクロ土師器大形

	トレンチ層位		トレンチ層位		トレンチ層位		トレンチ層位		トレンチ層位
1	9 Ⅴ	21	6	41	8 Ⅱ Ⅳ Ⅴ	61	3 Ⅳ～Ⅴ下	81	9 Ⅳ
2	9 排土	22	6	42	9 Ⅴ～Ⅶ	62	9 Ⅳ	82	9 Ⅴ
3	3 Ⅳ	23	3 Ⅳ＋6	43	3 Ⅳ	63	9 Ⅳ＋撹乱	83	9 Ⅴ
4	6	24	6	44	3 Ⅴ	64	4 撹乱	84	9 撹乱
5	7 Ⅱ Ⅳ	25	4 撹乱	45	3 Ⅳ～Ⅴ	65	6	85	6
6	6	26	5 Ⅰ´	46	6	66	6＋9 Ⅳ	86	6
7	9 Ⅳ	27	9 Ⅳ Ⅴ	47	3 Ⅳ	67	9 Ⅳ	87	6
8	6	28	6	48	9 Ⅴ～Ⅶ	68	6	88	6
9	9 Ⅴ	29	4 撹乱	49	6	69	3 Ⅳ	89	6
10	6	30	6	50	9 Ⅳ	70	3 Ⅴ下	90	6
11	6	31	6	51	4 撹乱	71	6	91	7 Ⅴ
12	2	32	4 撹乱	52	6	72	4 撹乱	92	7 Ⅳ Ⅴ
13	8 Ⅱ Ⅳ Ⅴ	33	6	53	2	73	9 Ⅳ	93	3 Ⅳ
14	6	34	6	54	2	74	4 撹乱	94	6
15	6	35	6	55	4 撹乱	75	1	95	9 Ⅴ～Ⅶ
16	9 Ⅳ	36	6	56	6	76	4 撹乱	96	8 Ⅱ Ⅳ Ⅴ
17	9 Ⅴ	37	6	57	3 Ⅴ下	77	6	97	4 撹乱
18	7 Ⅳ Ⅴ	38	6	58	3 Ⅴ下	78	9 Ⅳ		
19	3 Ⅳ	39	2	59	9 Ⅳ	79	4 撹乱		
20	6	40	4 撹乱	60	7 Ⅱ Ⅴ	80	9 Ⅴ		

表2　a地点包含層出土器一覧（第6トレンチ出土は図5を参照）

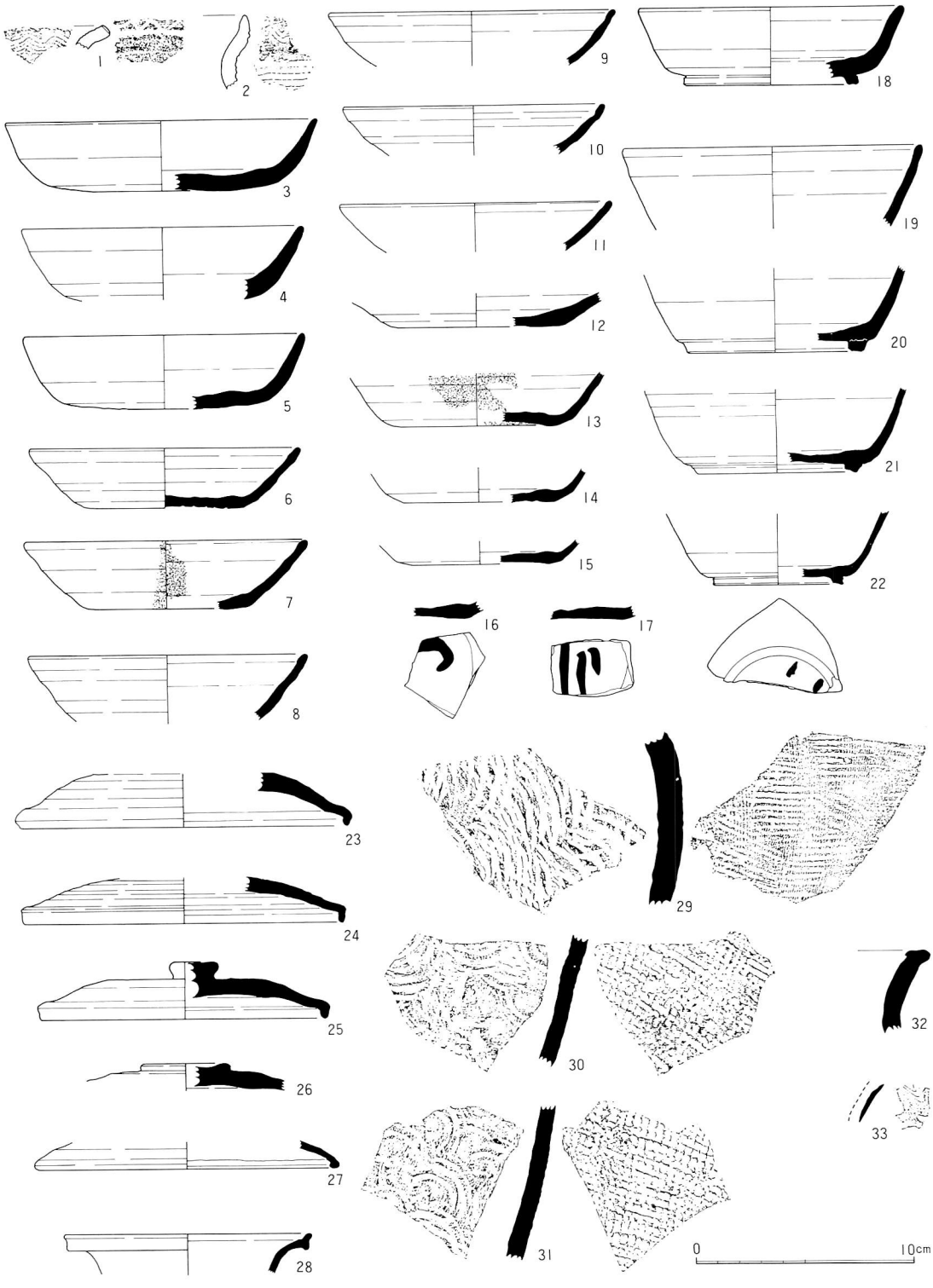


図7　遺物1（a地点包含層出土）

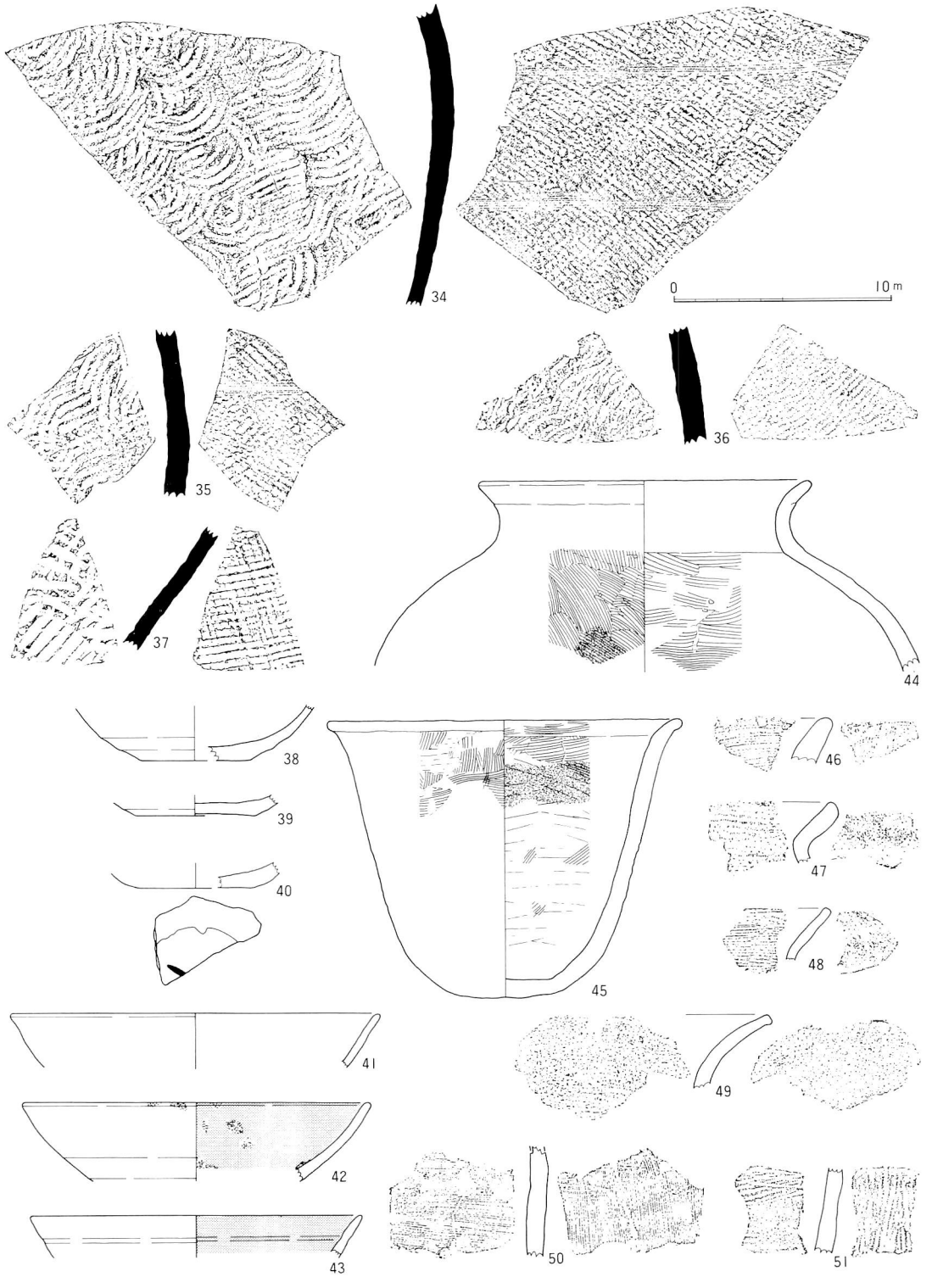


図8　遺物2（a地点包含層出土）

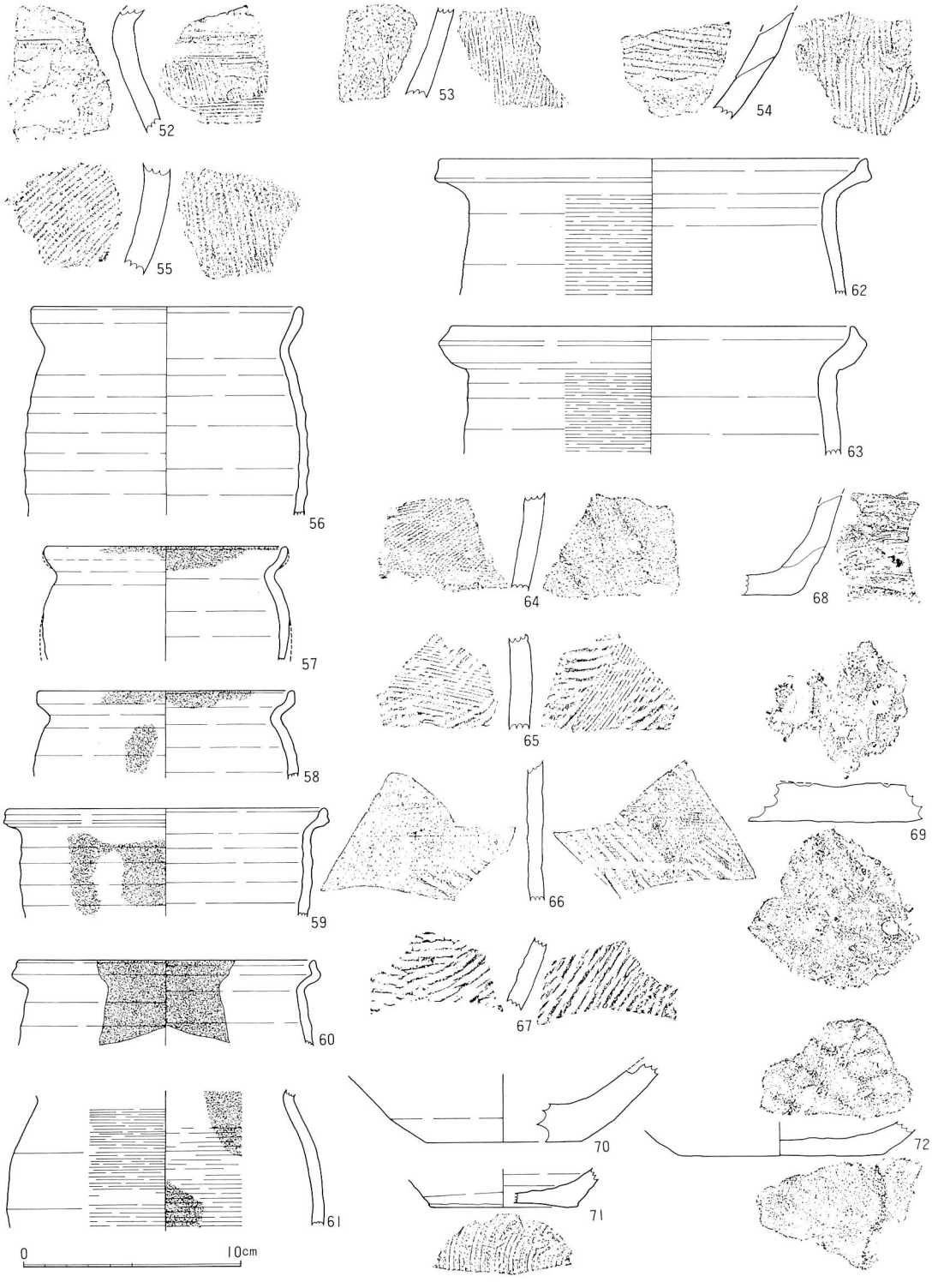


図 9　遺物 3（a 地点包含層出土）

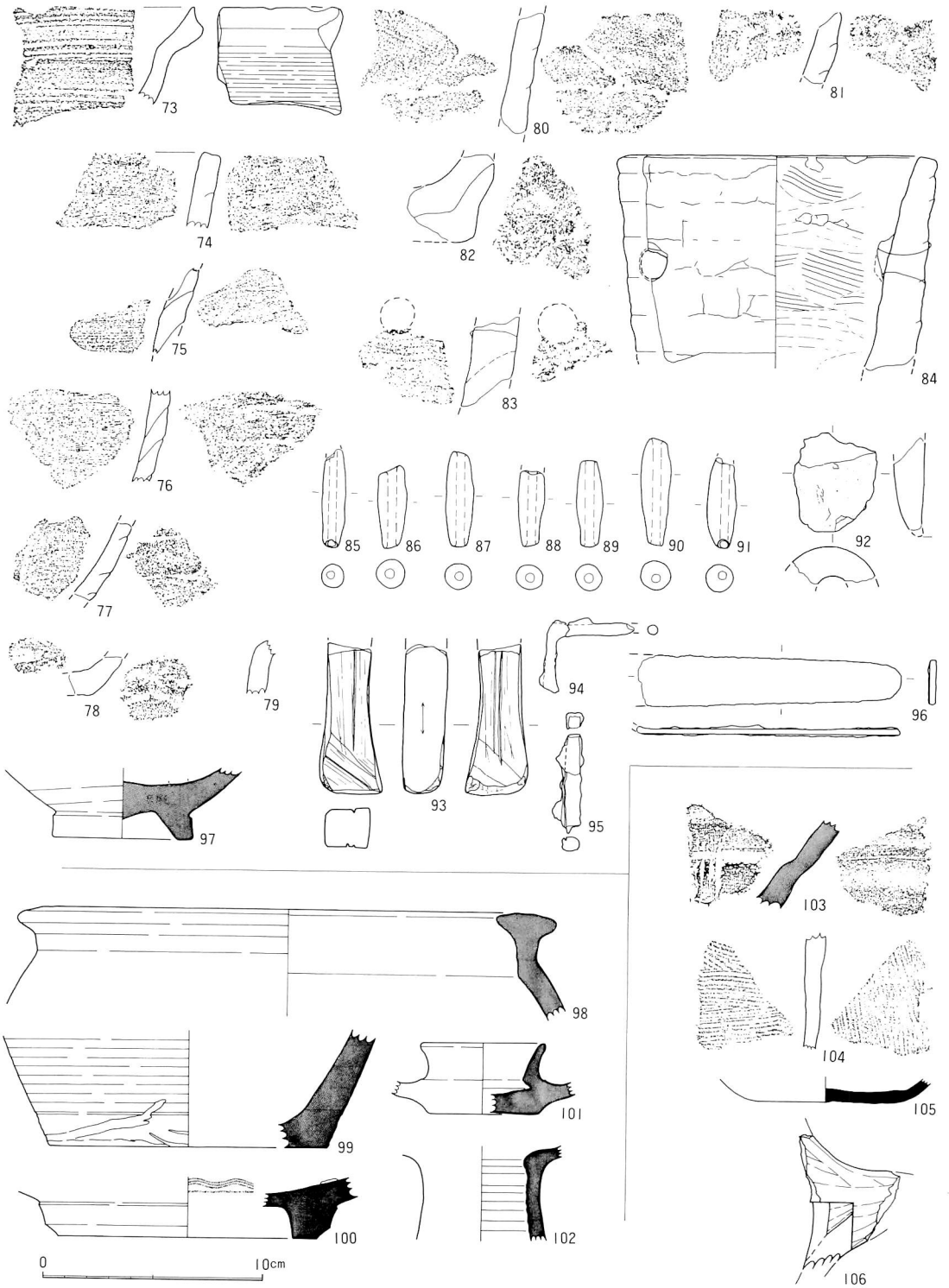


図10　遺 物 4　（73 ～ 97　a 地点包含層出土／98 ～ 102　a 地点東方畑地表面採集／103～106　b 地点東方畑地表面採集）

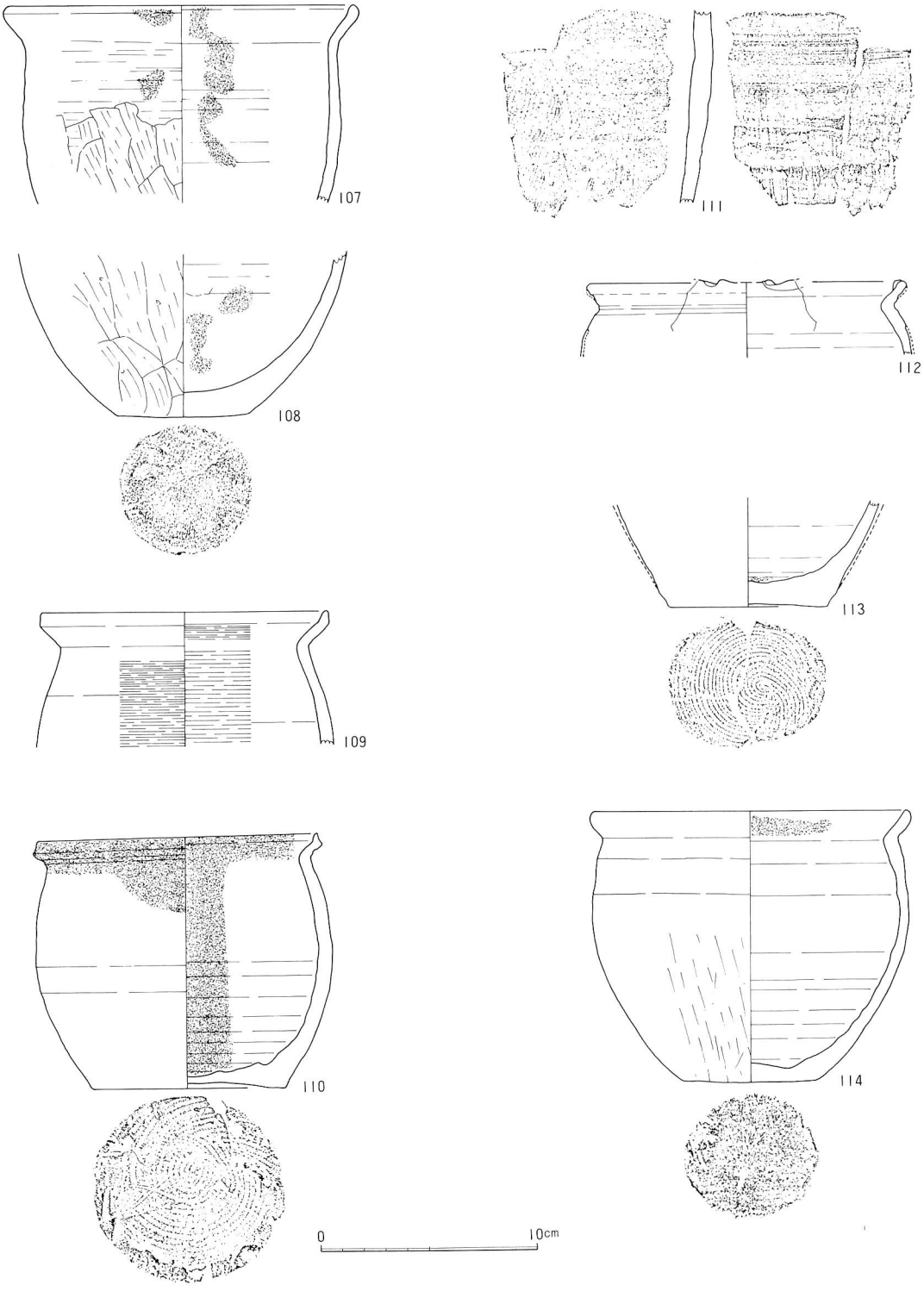


図11　遺物 5　（107～110　a 地点第 3 トレンチ南壁Ⅳ、Ⅴ層出土
111～114　a 地点第 3 トレンチ焼土状遺構周辺出土）

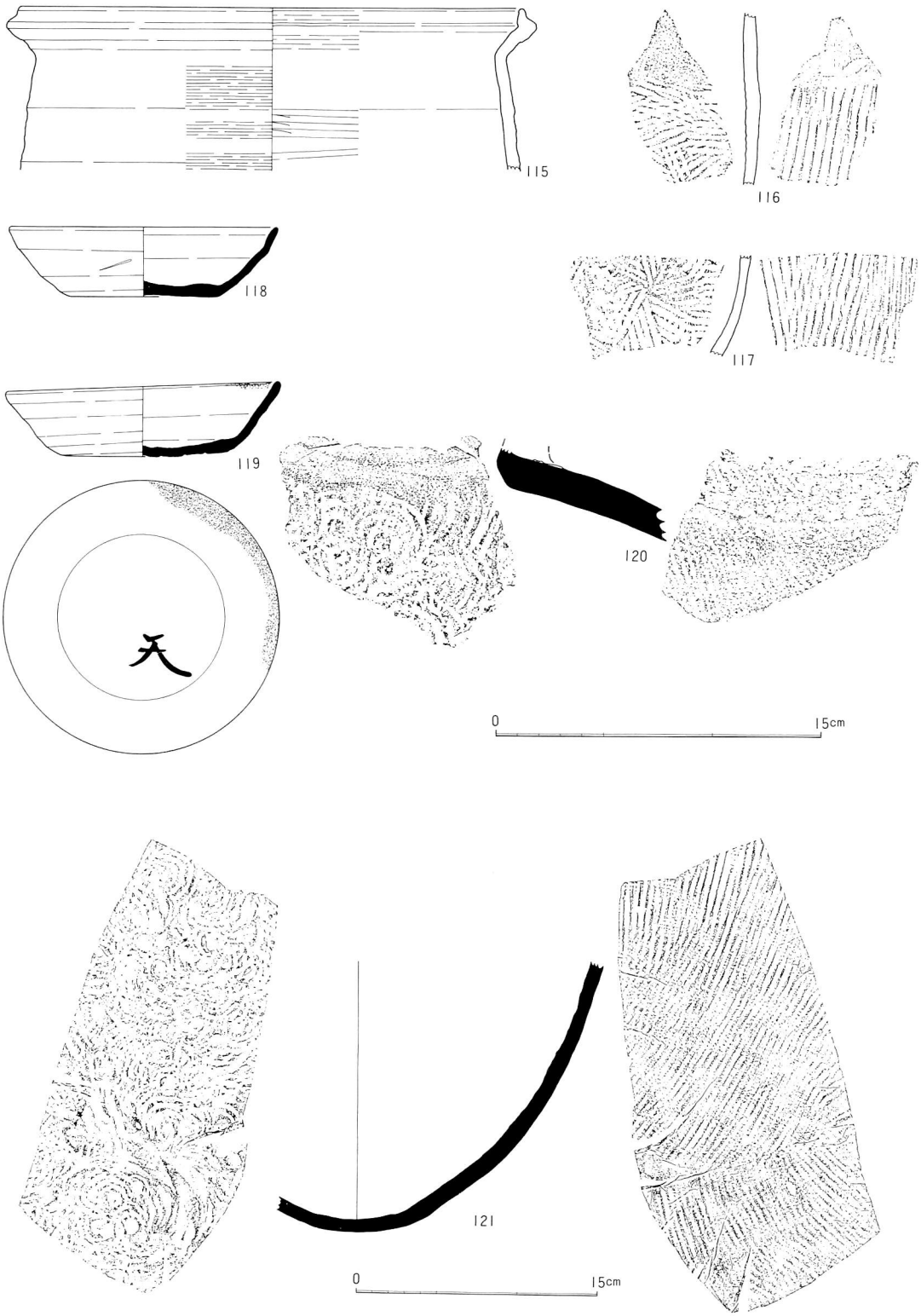


図12　遺 物 6（a地点第9トレンチ焼土状遺構周辺出土）

甕である。体部上半はロクロナデされ、下半は外面平行タタキ・内面放射状あて具痕である。なお放射状あて具痕は本例だけである。118・119は杯bである。118の体部外面にはヘラ状工具による引っ掻き傷がある。119の底部外面には細い書体で「天」と墨書されている。120は頚部内径32cm強を測る甕の肩部分である。外面平行タタキ、内面同心円である。外面に色変部及び熔着部がめぐり、頚部が接合面で脱落したものと観察される。胎土は粗く、白色粒が多い。121は外面平行タタキ、内面同心円の甕である。底部外面周辺は色変し、褐色土が熔着する。胎土は細かく、120とは別固体である。

③ 表面採集遺物

a地点の東に広がる畑から土師器タタキ成形甕、須恵器甕各1点のほか、近世・近現代陶磁片が採集された。中世遺物は認められない。98は口端が肥幅する鉄釉陶甕である。外面の一部に白色釉がかかる。99は無釉陶鉢で、底部外面は平坦である。100は内面施釉大皿である。内面に白色釉で圏線・波状文が施されるが、地は無釉である。内面に重ね焼き具の熔着があり、高台は削り出しである。101は灯明器と思われる。外面鉄釉で、底部は無釉、底部回転糸切りである。102は仏花器と思われる。外面に暗緑色の釉が施される。98～100は近世肥前系陶器と思われるが、他は不明である。

4．b地点の調査

(1) 概　　要

図13にトレンチ配置図を示す。対象地は以前に削平され、南側の道路に接する部分を除きコンクリートブロックが敷かれ堆肥置き場となっている。削平は北側で150cm程度を測り、ほぼ平らにされている。東側の畑も同様である。また対象地西側の南半、遺物槽部分は盛土されている。削平以前は南東向きの斜面であったと思われる。削平程度が少ないと思われる南端部に2×3m・2×2mの2カ所を設定し試掘を実施した。遺物等の出土はなく、若干の層位的事実を得たのみである。なお、試掘は総て人力によった。

(2) 層　　序

図14に層序を示す。Ⅰ層は堆肥置き場造成盛土である。黄褐色砂を主に、廃棄物層など含み、撹乱が著しい。Ⅱ層は暗褐色砂であるが、黄褐色砂などの混る撹拌層である。自然堆積ではなく、数回にわたり埋土されている。またⅥ層を切っている。Ⅲ層は暗褐色砂である。自然層と思われるが明らかでない。同層から近現代磁器・杭状に先端を尖がらせた細い丸木などが出土した。Ⅳ層はシルト質の灰白色細砂で非常に硬い。第1・第2トレンチとも南半部で形成され、北側では消失している。自然層である。Ⅴ層以下は地下水位のため不明確であるが、漸移砂層・黄褐色砂層・青灰色砂層などが認められる。南側に傾斜する。

以上Ⅱ層については、旧地表面に盛られたか、旧表土等を削平のうえ埋土されたように思われる。またⅢ層以下の傾斜は砂丘端部の状態を示すものであろう。東西ラインはほぼ水平な堆積状態である。近世以前の遺物は全く認められなかったが、削平以前、調査対象地に遺物包含層が存在したかどうか断定できない。

(3) 表面採集遺物

b地点の東側に広がる平坦な畑地一帯に遺物が散布する。須恵器では無台杯・有台杯・甕・長頸瓶・横瓶など、土師器では杯・内黒杯・タタキ成形甕・ハケ目調整甕などがある。また中世珠洲焼も散布する。大形片はない。10図103は珠洲擂鉢、104はハケ目調整土師器甕、105は須恵器杯bである。106は土師器の把手部である。把手部は体部と一体に成形され、ケズリ調整痕を残す。そののち体部内面側を粘土板で塞ぐが、中空である。体部が湾曲しており、大形の把手付甕であろう。

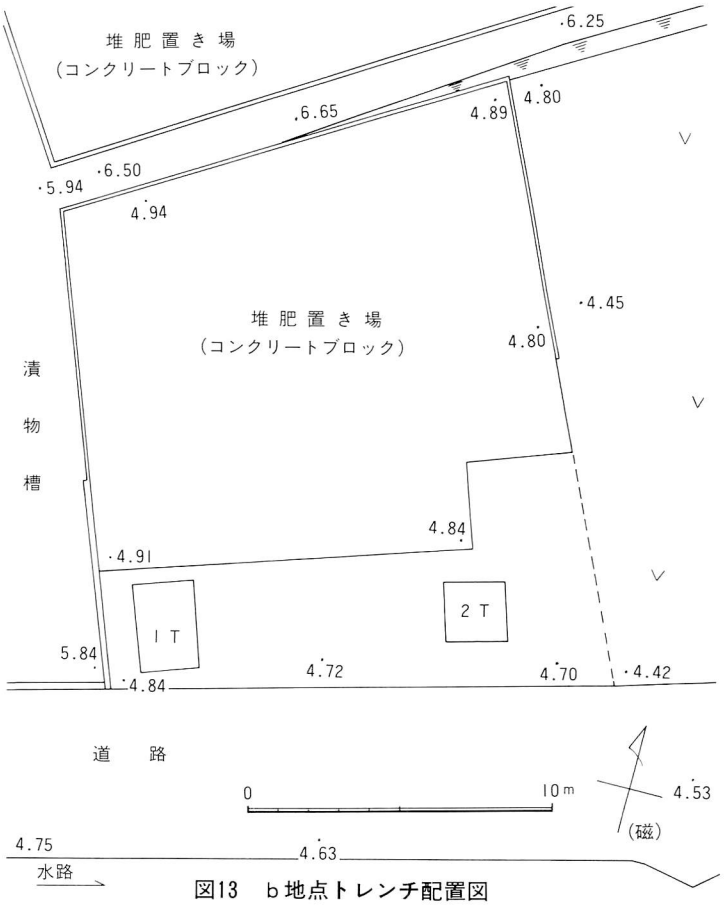


図13 b地点トレンチ配置図

5. ま と め

a地点・b地点はb地点東側畑地の採集遺物からみると土師器・須恵器では共通点があるが、珠洲焼の有無などの違いがある。しかしb地点の調査で得られた所見は僅かであり、a地点と直接比較できる資料はない。また、a・b両地点間の遺物散布状態等も不明である。いくつかの事実と問題点を記す。

(1) a 地 点

① 奈良・平安時代の遺物包含層が存在する。西側では安定しており、さらに拡がることは確実である。複数の時期がある

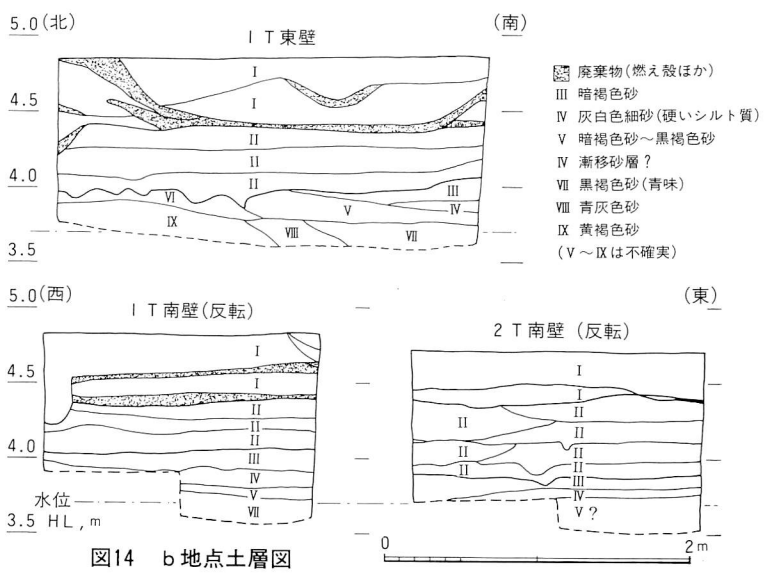


図14 b地点土層図

が、層位的には分離できない。中世遺物は出土しない。

② 弥生中期の遺物が微量出土したが、客体的な存在である。北側に隣接する屋敷浦の遺物の中に櫛描文があり（注３）、これと関係する可能性が考えられる。

③ 須恵器杯の特徴から８世紀中葉と９世紀後半の２つの時期が存在していたことは確実である。量的には９世紀後半が多い。土師器杯椀の量は少ない。

④ 土師器甕・壺はハケ目調整、ケズリ調整、ロクロ調整に分けられる。ハケ目調整のうち一部は器形等から８世紀中葉に先行する可能性が強い。８世紀中葉の須恵器に共存すると考えられる土師器甕は、他のハケ目調整甕と考えられ、平底である。９世紀後半の須恵器に共存すると考えられる土師器甕はロクロ調整甕で小形と中大器形の二者がある。また器形から９世紀後半のある程度の年代幅が想定される。

⑤ 土師器甕のうち、ケズリ調整は多くない。小形器形が明らかであるが、大形器形も存在したようである。小形器形は底部など、ロクロ調整のものと器形・技法が異なるが、ほぼ同じ法量でロクロが使用される。一般にケズリ調整はロクロ調整に先行すると考えられるが、出土状態からロクロ調整と共伴する可能性がある。９世紀後半の年代幅の中に位置づけられる可能性が強い。

⑥ 土師器・須恵器に一定量の製塩土器が伴い、その存在は容体的ではない。胎土・調整・焼成等が異なる２つのタイプがあり、大形である。ａとしたものは系統は不明である。ｂとしたものは、９世紀後半に類例がある。ａ・ｂ二者は時期差・用途差などによるものが明らかでない。また、体部有孔の筒形土製品と製塩土器との関連の有無も不明である。

⑦ 土器以外では、土錘・鉄製品・砥石・骨片・スラグ状固形物・焼けた形跡のある石塊が出土する。

(2) ｂ 地 点

① 削平のため、遺物包含層は現在存在しない。過去に存在したかどうかは明らかでない。

② 東側に拡がる畑地には土師器・須恵器・中世陶器が散布し、位置的にはこの散布域に含まれる。

注）

1 坂井陽一 「新潟市佐潟周辺に分布する新潟砂丘砂――新潟砂丘の形成について（その２）」『新潟県立教育センター研究報告』第54号 1982年３月

2 酒井和男 「新潟市の遺跡包含地について」『昭和54年度新潟市文化財調査資料』 1980年３月
酒井和男 「新潟市赤塚地区の遺跡と遺物について」『昭和55年度新潟市文化財調査報告書』 1981年３月
半沢正 「遺跡紹介」『フィールドノート』２号 新潟大学考古学研究部 1983年３月

3 酒井和男 1981年３月 （前掲）

大藪（おおやぶ）遺跡

1．はじめに

大藪遺跡の試掘調査は、葉たばこ作付農家数軒で組織する組合の、葉たばこ乾燥施設建設に伴うもので、調査対象地は新潟市赤塚字稲場2615番地の433㎡である。現地調査は５月10日、調査には新潟市教育委員会文化行政課課員藤塚明・渡辺朋和があたった。また事業者から人力の提供など、多大な協力をいただいた。なお、遺物等の出土はなく、建設工事は継続された。

2．遺跡と調査地点

遺跡の立地する砂丘列は佐潟南岸に位置し、佐潟周辺砂丘列中、新砂丘Ｉｆに分類される（注１）。遺跡は砂丘列が東端で沖積地に舌状に張り出した部分を占め、範囲は広い（図１・15）。前節の前田遺跡とは砂丘間低地を狭み、向かい合う位置にある。過去の出土遺物は多く、寺院跡の伝承をもつ（注２）。平安・中世の２時期が明らかであるが、特に中世は数基の宝篋印塔などがあるほか、和鏡・多量の埋納銭などが偶然発見されており、特異である。遺物散布量は多く、赤塚地区の有力な中世遺跡と考えられる。遺跡の中心は東半と考えられ、西側には遺物がほとんど散布せず範囲も不明確である。調査対象地は遺跡西端近くの北向き斜面で、標高10ｍ程度を測る。周辺に土師質土器が微量散布する。

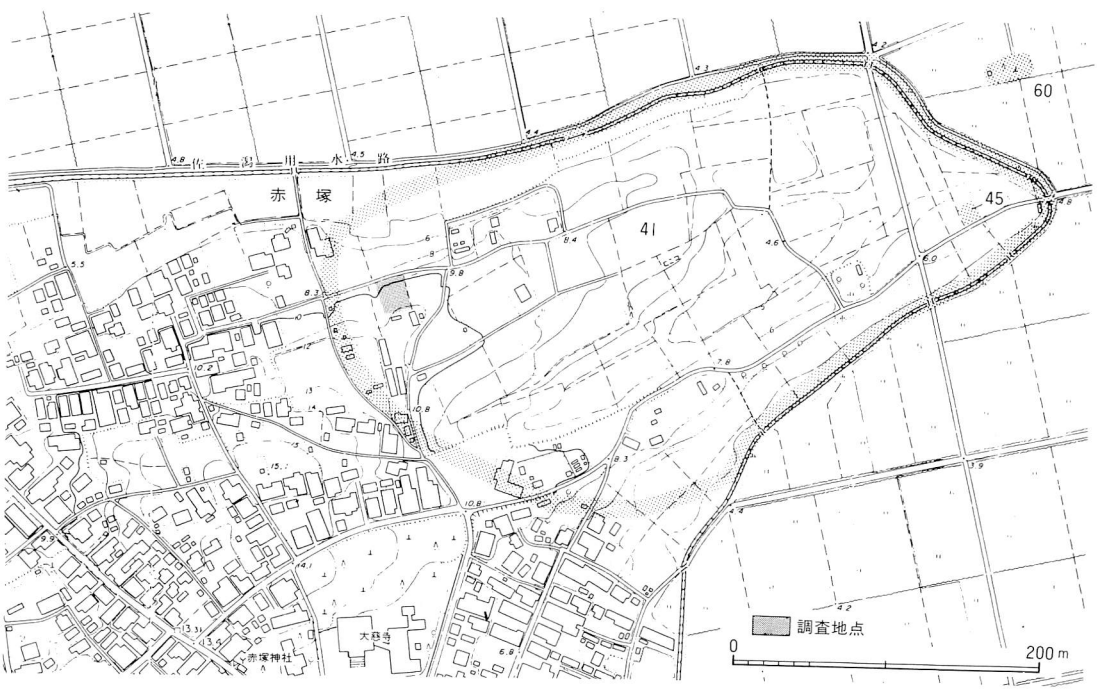


図15　調査地点とその周辺

3．調　査　結　果

対象地はかなり強い北斜面のヘリにあたる。道路北側は削平されて崖状を呈する（図16）。調査時には造成工事により、南端で約２ｍ、北端で数10cmの削平がなされていた。また施設の基礎部分には１ｍ四方、深さ60cm程度の穴が８ケ所掘られ、造成各土下には１カ所を除き、黄褐色砂が露出していた。

対象地北端に、２×４ｍ・２×3.5ｍのトレンチを設定した結果、次の層序が確認された。Ⅰ造成客土、Ⅱ暗褐色砂、Ⅳ黒褐色砂、Ⅴ漸移砂、Ⅵ黄褐色砂である。Ⅱ層は耕土及び耕土のしまった層である。Ⅳ層は自然腐植層であるが締まりがなくやわらかい。Ⅴ層は生物痕らしきシミを持つ。第１トレンチではⅢ暗褐色砂が堆積する大きな落ち込みが認められた。堀の形跡はなく自然落ち込みと思われる。第２トレンチでは樹木によると思われるⅣ層の落ち込みが認められる。これらを除けば全体的に、東西ラインではほぼ水平、南北ラインで北に傾斜する。遺物等の出はなく、対象地では遺構・遺物包含層は存在しなかった可能性が強い。

なお、試掘は総て人力により、仮ベンチマークの標高測量は略した。

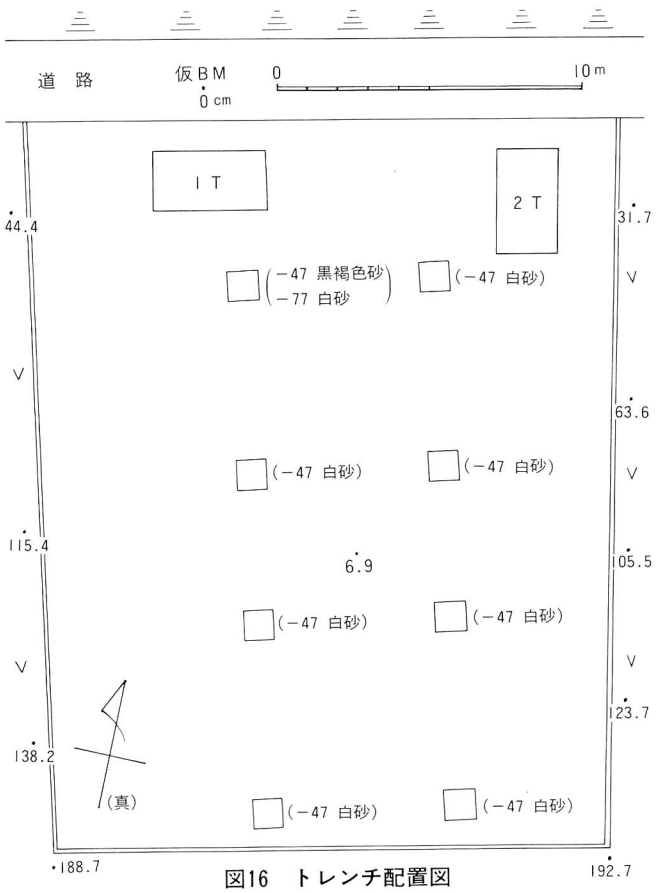


図16　トレンチ配置図

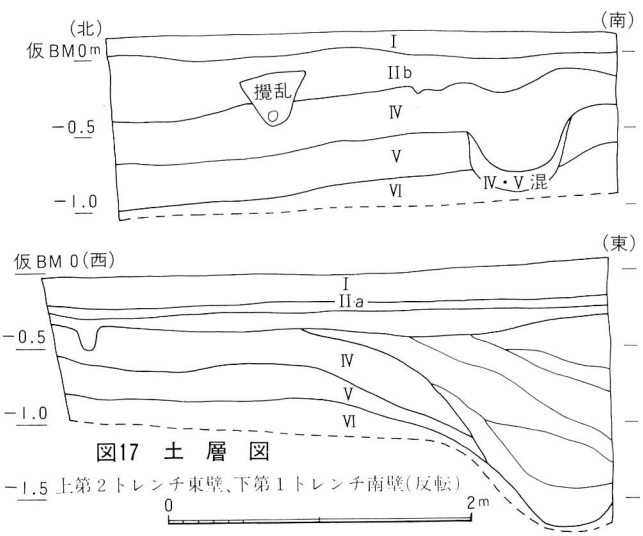


図17　土　層　図

注）１　坂井陽一　1982年３月（前掲）

２　酒井和男　1981年３月（前掲）

並松景政　「大薮遺跡の紹介」『越後赤塚』６　赤塚郷土研究会　1987年７月

関塚英嗣ほか　「角田山東麓および佐潟周辺の遺跡調査報告Ⅲ　第２章歴史時代の遺跡」『フィールドノート』５号　新潟大学考古学研究部　1988年３月

茗荷谷遺跡

1．調査に至る経過

新潟市大江山地区に所在する茗荷谷遺跡は、1972年５月、遺跡周辺の砂取り工事の際に発見された。同年11月市教育委員会が主体となって緊急発掘調査を行った結果、住居の柱穴らしい遺構が検出され、須恵器・土師器のほか銅製袴帯金具・刀子などが出土し、奈良・平安時代の集落跡であることが明らかにされた（注１）。存続期間が長く、特殊な遺物が出土しており、有力な遺跡と考えられる。

1988年４月、遺跡を含む24.7haの地域を対象として、農業基盤総合整備事業に伴う土地区画整理事業が計画された。市文化行政課は同年７月13・14日に市農地課の協力を得て事業地全域の分布調査を行い、計画地は過去の大規模な砂取り工事によってほぼ全域が削平されているが、遺跡推定範囲を中心に少量の遺物が散布することを確認した。また現地はすでに道路造成等に着手しており、土砂の盛土も見られる状態であった。これらの結果を基に関係機関等で協議を行い、遺跡の残存している可能性のある部分を中心として、範囲等確認調査を早急に実施することとなった。市文化行政課は発掘に係わる通知を行い、８月１日より調査を開始した。現地調査は文化行政課課員、小池邦明・藤塚明・前谷達也・太田潤一が当った。

2．遺跡の位置と周辺の環境

(1) 位置と地形

茗荷谷遺跡は新潟市茗荷谷字伝次山460番地１ほかに所在し、市街地中心部の東南約９km、阿賀野川左岸の南西約1.7kmに位置する。地形的には、新砂丘Ⅰ－３に対比される亀田砂丘後列の東部にあり（注２）、砂丘本列から南東に向かって半島状に突き出た砂丘上に立地する。南側には水田を挟んで亀田砂丘前列（新砂丘Ⅰ－２）の横越村藤山の集落があり、北側には旧地形図で標高約17.4ｍの最高位を測る後列砂丘が連なっている。遺跡の旧標高は7.5ｍ程度を測る。

(2) 周辺の遺跡

図18に調査範囲と周辺の遺跡を示す。亀田町・横越村を含む大江山周辺は、縄文時代から中世にかけての遺跡が集中している地域である。時代の古い縄文・弥生の遺跡は前列砂丘に沿って分布しており、後列砂丘ではほとんど発見されていない。最も時代の古い遺跡は亀田町城山遺跡で、縄文時代前期末の円筒下層ｄ式系土器や鍋屋町式類似土器が出土している（注３）。縄文中期では前半の資料が砂崩（１）・横越小丸山（15）・迎山（19）から、後半の資料が小丸山（３）・中山（10）から出土している。砂崩では深鉢形土器数個を配列した遺構の存在が伝えられている。後期では笹山前（13）、晩期では前郷（18）・小丸山（15）・迎山が分布する。前郷からは大洞BC～C1期の資料が採集されている。

弥生時代では、図幅外であるが亀田町手代山排水路や城山には中期前半の資料が見られ、中期後半

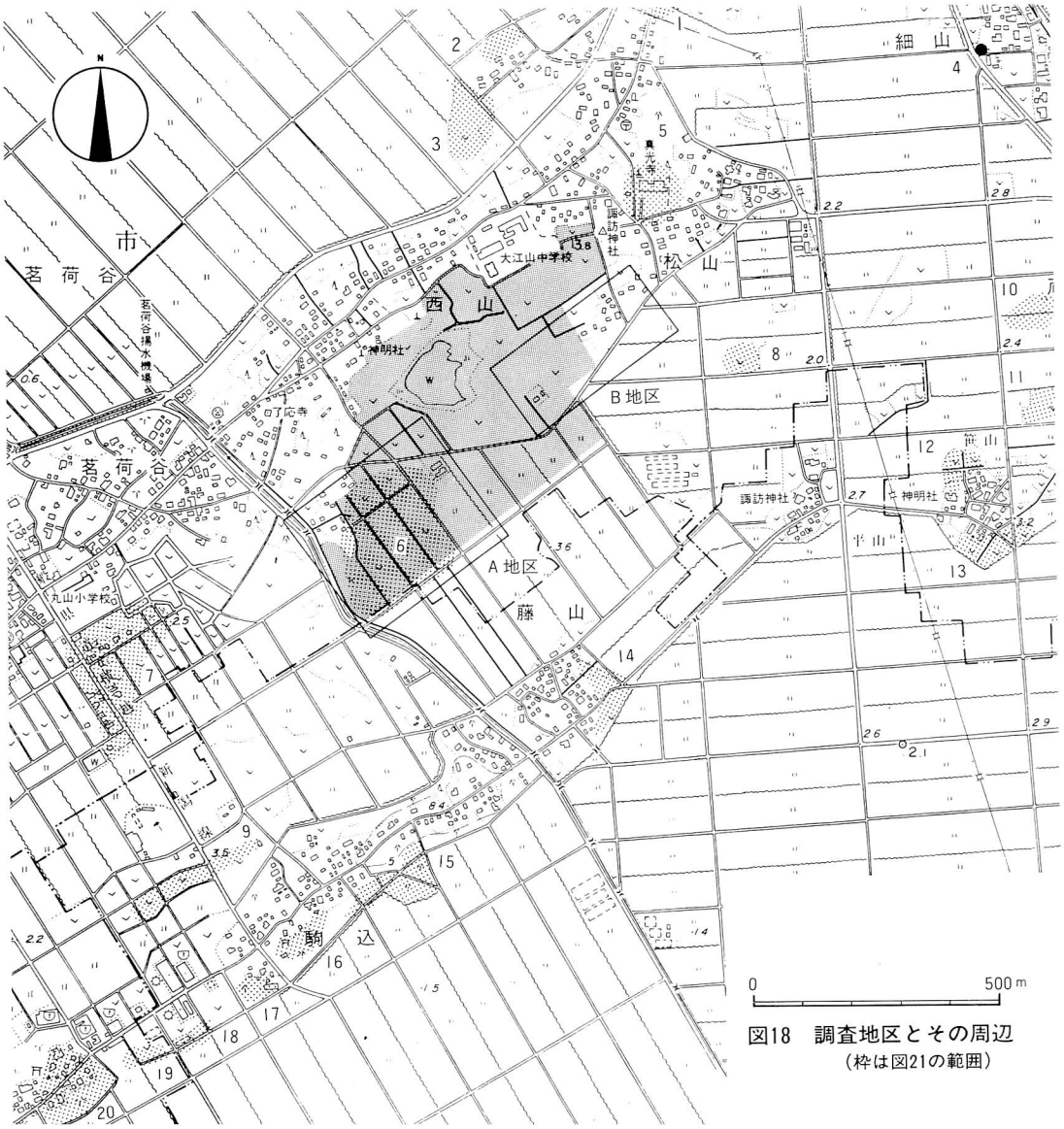


図18　調査地区とその周辺
（枠は図21の範囲）

No.	名　称	時　代　等	No.	名　称	時　代　等
1	直り山A	平安	12	笹山神明社裏	平安
2	直り山B	平安	13	笹山前	縄文後・弥生後・奈良・平安
3	小丸山	縄文中・古墳・平安・中世・近世	14	藤山	奈良・平安・中世
4	細山石仏	中世	15	小丸山(横越村)	縄文中晩・弥生中・奈良・平安
5	松山	(中世陶器・近世陶磁器)	16	駒込墓所	平安
6	茗荷谷	奈良・平安	17	山ン家	弥生後・平安
7	丸山	平安	18	前郷	縄文晩・弥生後・奈良・平安
8	松山向山	平安	19	迎山	縄文中晩・平安・室町
9	居浦郷	平安	20	砂崩	縄文中・平安・室町
10	中山	縄文中・古墳・奈良・平安			
11	蔵岡城山	縄文・平安・鎌倉（城館）	凡例　中＝中期　後＝後期　晩＝晩期		

表３　図18遺跡地名表

では笹山前・山ン家（17）・小丸山（15）がある。小丸山では弥生中期後半の住居跡１棟が発見されている（注４）。

古墳時代の遺跡は不明確である。図示した範囲では山ン家・中山等があるが資料は少ない。

奈良・平安時代に入ると遺跡は急増する。砂丘全体だけでなく自然堤防上にも分布し、大規模な集落が形成される。発掘調査が行われた小丸山（３）では９世紀後半から10世紀前半にかけての集落跡が発見されている（注５）。

中世の遺跡は調査が少ないが、図幅外の亀田町三王山・中の山付近に多く見られるほか、松山（５）・蔵岡城山（11）などが散在する。奈良・平安時代に比べて遺跡数は減少する。

３．遺跡と調査の方法

(1) 遺　　跡

遺跡は前述のように亀田砂丘後列上に位置している。付近の地形の変化を、1931年、1978年作成の地形図から比較したのが図19・20である。図からもわかるように、1931年当時の標高を現在も保っているのは標高12.6ｍの松山諏訪神社付近のみで、他は1970年代の砂取り工事によって２～10ｍほど削平されている。遺跡中心部の標高も7.5ｍから４ｍ以下に変わり、大きく地形が改変されている。

調査対象地の遺跡散布状態は希薄である。地表面から近現代の陶磁器・泥めんこ類と縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器の細片がごく少量採集された。畑は作付を停止し、ビニールハウス等も撤去されていたが、水田は耕作が続けられていた。一部には客土が見られ、道路・水路工事が進んでいた。

(2) 調査の方法

調査対象地は全面にわたって大規模に削平されていることが明らかなため、遺物包含層が残存している可能性のある、旧地形図で標高の低い部分を中心に調査区を設定した。茗荷谷遺跡付近をＡ地区、少量の土師器が採集された松山側をＢ地区とし、計画予定の道路・水路に沿って５×２ｍのトレンチをそれぞれ32ケ所、７ケ所設定した（図21）。

掘り下げには0.4m³級のバックホーを使用した。トレンチ番号は発掘順に仮番号を付け、整理時に一連番号を付け直した。レベルは発掘地点に近い道路上に数点の仮ベチマークを設け、後から事業計画地内に設定されていた３ケ所の標高杭からレベル移動して絶対高を求めた。

調査は遺構・遺物とも検出されず、順調に進行した。作業期間は８月１日から５日にかけての計５日間、実質発掘面積は390m²である。調査にあたっては、事業者である亀田郷土地改良区から重機・作業員について協力を得た。

４．調 査 の 成 果

(1) 層　　序

図22・23に各トレンチの土層柱状図を示す。

Ⅰ層　表土・耕作土。Ⅰａ層は工事によって盛土された黄褐色砂層、Ⅰｃ層は深耕によって撹乱さ

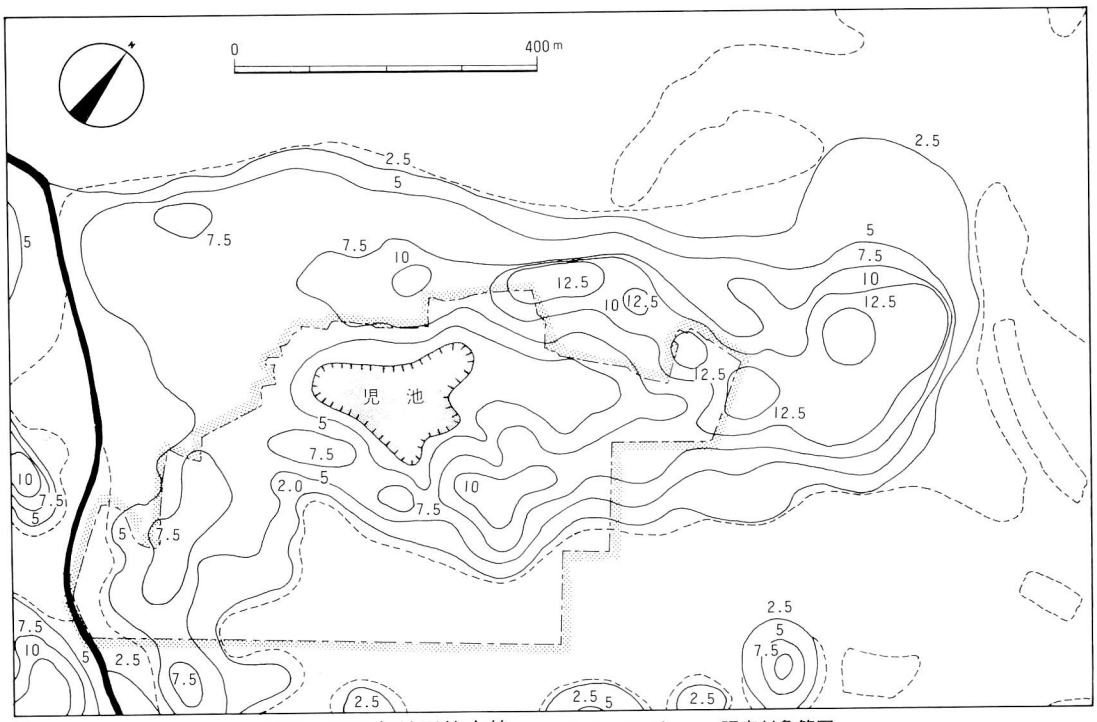


図19　1931年地形等高線　——2.5ｍコンタ　－－－調査対象範囲
（1931年修正測図、１：25,000地形図から作成）

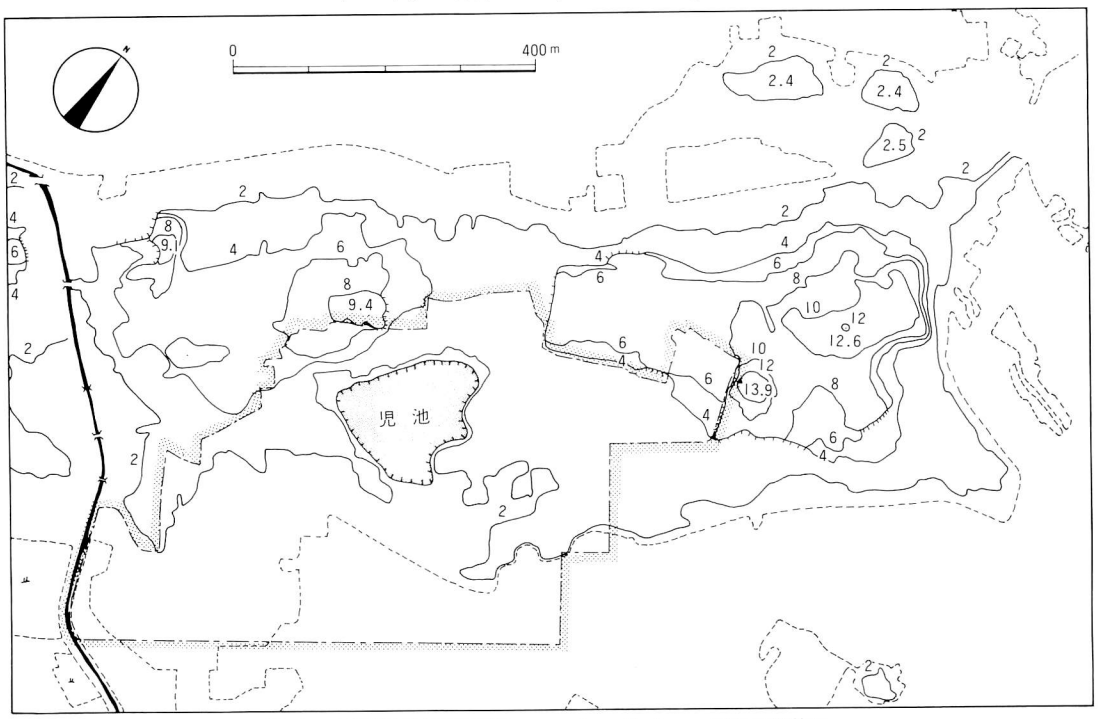


図20　1978年地形等高線　——２ｍコンタ　－－－調査対象範囲
（1978年修正測図、１：2,500基本図から作成）

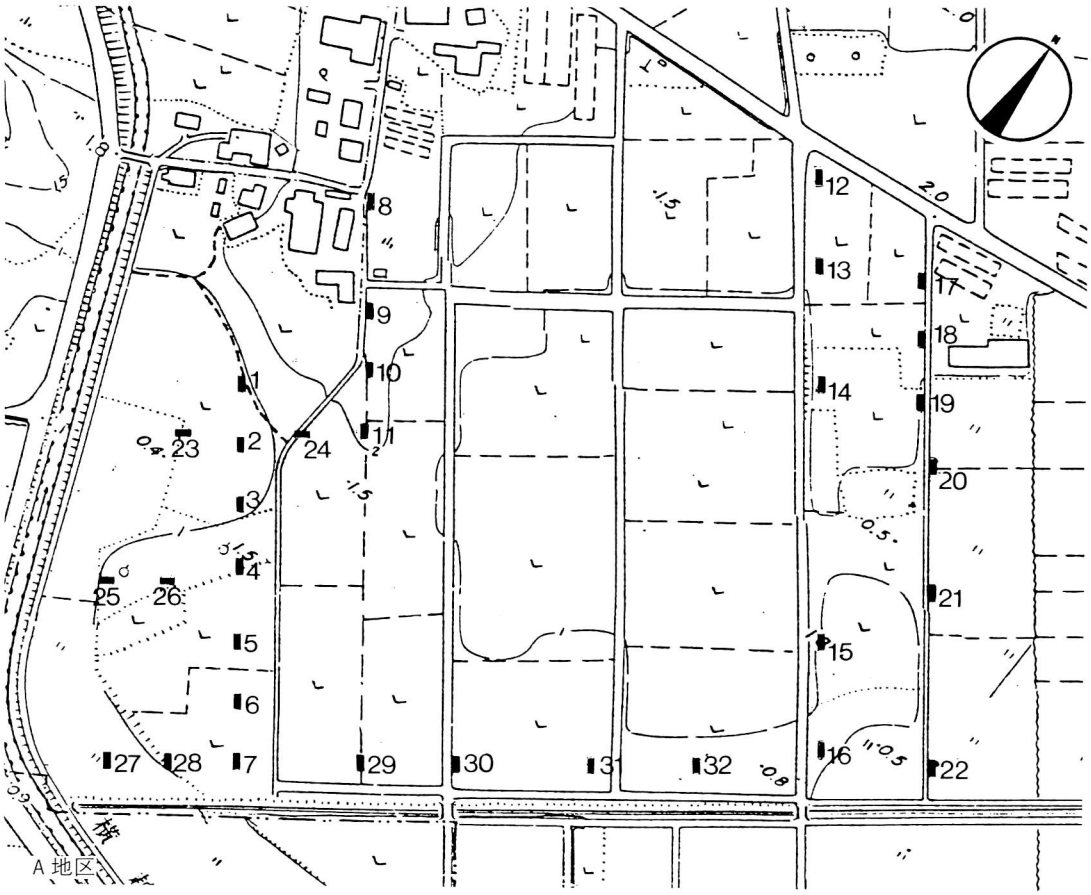


図21　トレンチ配置（1/2,500）

れた黒褐色土である。

II層　客土。暗褐色土～黄灰色の土あるいは砂で、各トレンチごとに色調・層厚とも異なり、対比については不明確な点が多い。畑・水田等耕作によって形成されたと思われる。

III層　粘土層ないし砂層。湿地状態で形成されたと思われる自然層で、A地区の水田面19～23・27、B地区の4・7などに発達して見られ、赤褐色～黄褐色～灰白色の粘土層・植物層が互層をなす。各トレンチによって層厚が異なり、対比については不明確な点が多い。

IV層　黒褐色砂。いわゆるクロスナと呼ばれる腐植砂層である。色調は薄く、層厚は10～20cmである。遺物はまったく出土しない。

V層　褐色砂。IV層の漸移層であり、IV層の残存しない地点ではほとんど欠如している。下層のVI層との境は不明瞭である。

VI層　黄灰白砂。いわゆる白砂層である。地山の砂層として砂丘列全体を覆っている。

A地区の遺跡中心部の大半は表土直下に地山の黄灰白砂が現れ、包含層等は検出されなかった。標高の高い8～12のラインでも同様であった。黒褐色砂は遺跡外縁の29～16のラインなどで見られるが、層厚も薄く、遺物をまったく含んでいなかった。遺跡周辺は急激に深くなり、腐植層と粘土層の互層が現れ、包含層等は認められなかった。

B地区でも大半は表土直下の黄灰色砂が現れ、包含層は認められなかった。

(2) 採集遺物

今回の調査ではトレンチから検出された遺構はなく、遺物も出土しなかった。以下に取り上げる遺物はすべて地表面からの採集品である。細片のみで復元できるものはない（写真12・13）。

縄文土器（18）　1点のみである。胴部が張る深鉢の肩部破片で、外面の屈曲部に一条の隆線が巡る。外面明茶褐色、内面暗褐色。中期と思われるが明確でない。

須恵器（1～16）　全部で33点採集された。杯蓋・無台杯・有台杯・甕などの器種がある。杯底部はいずれも回転ヘラ切りである。須恵器は遺跡中心部から採集したものが多い。

土師器（21・22）　ほとんどが甕の細片である。

土師質器（19・20・23・24）　甕類と思われる口縁部破片のほか、胴部の小破片がある。中世以降のものと思われる。

珠洲焼（17）　1点のみである。外面に叩き目のある甕の胴部破片。

泥人形（25・26）　2点とも細片で形状等不明。素焼きで明茶褐色をなす。

泥めんこ（27・42）　14点中40のみひょっとこと思われる顔をかたどったもので、他は円盤状を呈する。桜・団扇・文字などの絵柄のあるもの、無文ものがある。裏面に指紋の残るのも見られる。いずれも径1.5cm、厚さ5mmほどの素焼きのもので、泥人形とともに近世以降の遺物である。

陶器・磁器　調査対象地の全域から採集された。近現代のものをかなり含んでいる。

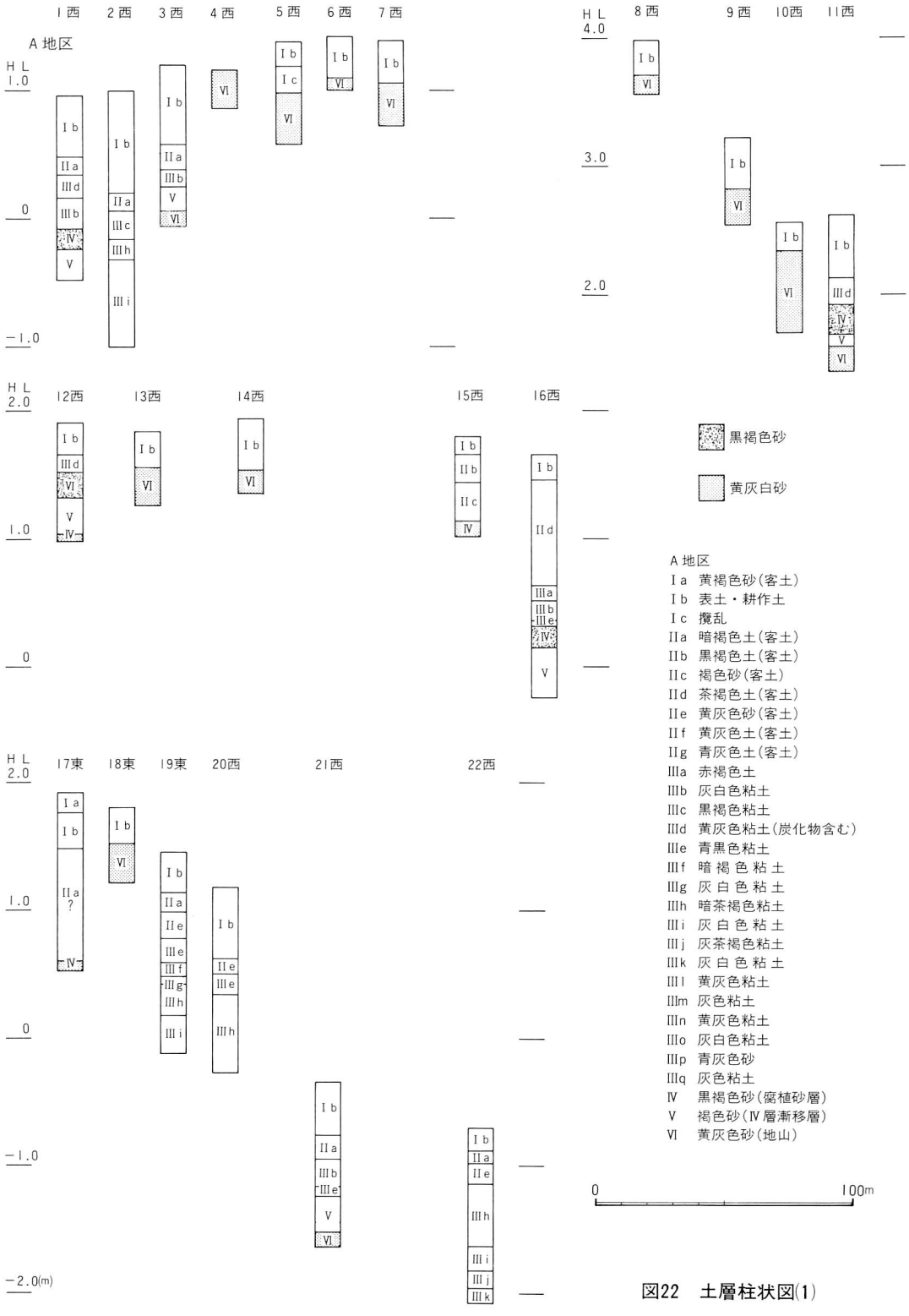

A 地区
1西
2西
3西
4西
5西
6西
7西
8西
9西
10西
11西
12西
13西
14西
15西
16西
17東
18東
19東
20西
21西
22西
HL
1.0
0
−1.0
4.0
3.0
2.0
−2.0(m)
黒褐色砂
黄灰白砂
A 地区
Ia 黄褐色砂(客土)
Ib 表土・耕作土
Ic 攪乱
IIa 暗褐色土(客土)
IIb 黒褐色土(客土)
IIc 褐色砂(客土)
IId 茶褐色土(客土)
IIe 黄灰色砂(客土)
IIf 黄灰色土(客土)
IIg 青灰色土(客土)
IIIa 赤褐色土
IIIb 灰白色粘土
IIIc 黒褐色粘土
IIId 黄灰色粘土(炭化物含む)
IIIe 青黒色粘土
IIIf 暗褐色粘土
IIIg 灰白色粘土
IIIh 暗茶褐色粘土
IIIi 灰白色粘土
IIIj 灰茶褐色粘土
IIIk 灰白色粘土
IIIl 黄灰色粘土
IIIm 灰色粘土
IIIn 黄灰色粘土
IIIo 灰白色粘土
IIIp 青灰色砂
IIIq 灰色粘土
IV 黒褐色砂(腐植砂層)
V 褐色砂(IV層漸移層)
VI 黄灰色砂(地山)
0
100m

図22　土層柱状図(1)

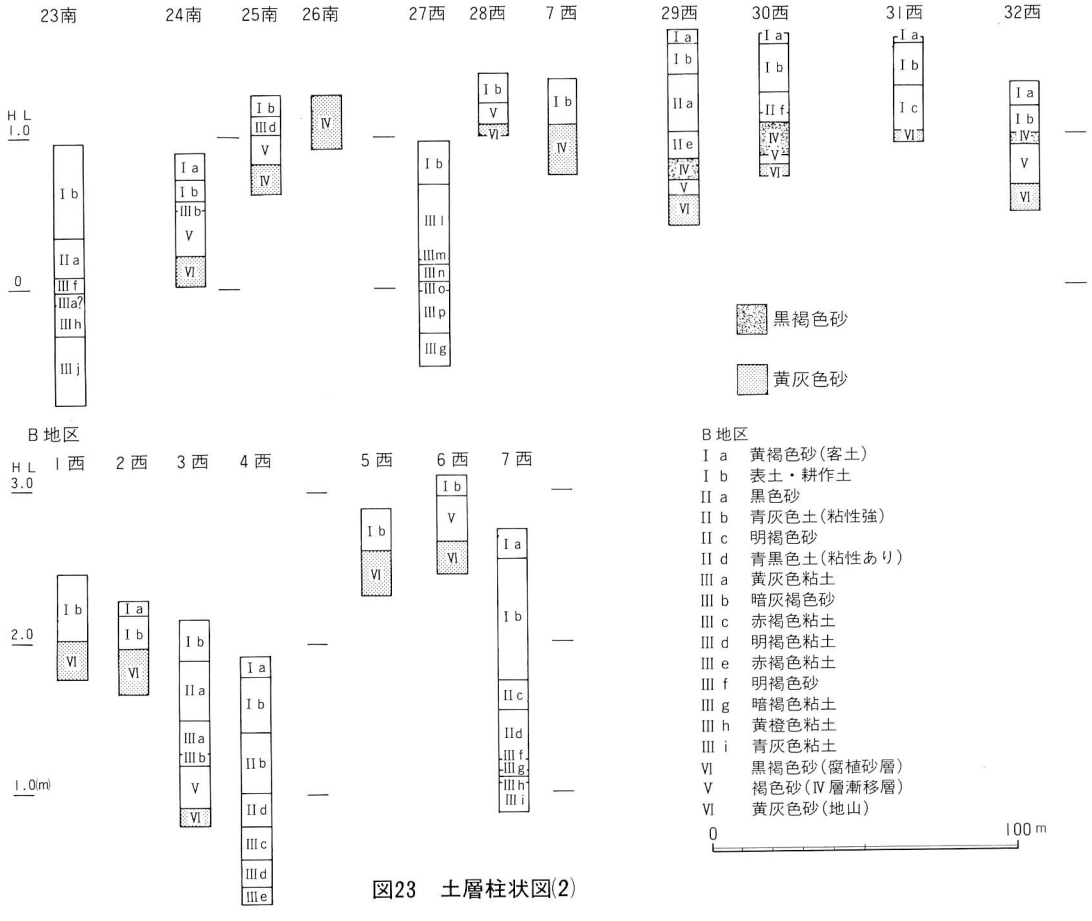


図23　土層柱状図(2)

5．ま と め

今回の発掘調査の結果、遺跡を含めた調査対象地は、すでに過去の砂取り工事によって大規模に削平されており、遺構・遺物を包蔵する層位は検出されなかった。一部に黒褐色腐植砂層が残存する地点が認められたが、遺物はまったく出土しなかった。茗荷谷遺跡は、そのほとんどが消失したものと思われる。

注)

1　坂井和男ほか　「大江山の遺跡」『大江山地区の遺跡』　新潟市教育委員会　1987年３月
2　坂井陽一　「大江山周辺の地形・地質」『大江山地区の遺跡』（前掲）
3　坂井和男ほか　「亀田町周辺の遺跡調査について―第１線砂丘を中心として」『明窓』第４号
　　新潟東工業高校生徒会　1966年３月
4　家田順一郎　『小丸山遺跡』　横越村教育委員会　1987年３月
5　新潟市教育委員会　『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』　1987年３月

ツ ル 子（ね） B 遺 跡

1．は じ め に

ツル子B遺跡の試掘調査は、漬物食品加工会社の工場拡張に伴うもので、調査対象は新潟市神山字ツル子301番地ほかの約1,700㎡である。現地調査は11月21日～30日の間実質６日間実施され、調査には新潟市文化行政課課員小池邦明・藤塚明・前谷達也・坂上修があたった。調査の結果、遺跡が対象地に所在する可能性は認められず、工事着工に支障はないと判断された。

2．遺跡と調査地点

遺跡の立地する砂丘列は、佐潟周辺砂丘列のうち新砂丘IIｃに分類される（注１）。周辺は各砂丘列が接し、砂丘列間低湿帯はなく、砂丘帯内部に遺跡は位置する（図１・２４）。1981年に周辺の74・75・77番遺跡とともに遺跡地名に掲げられた（注２）。土師器ほかが採集されている。また33番遺跡では石鏃・石匙等の石器が古くから採集されている（注３）。赤塚地区では、砂丘の縁辺部に良好な遺跡が分布するが、砂丘帯内部の遺跡は遺物散布が希薄で漠然としており、実態不明の遺跡が多く、本遺跡もそのひとつにあげられる。試掘時には、近世近現代陶器片とともに土師器が１点採集されたが、こうした散布状態は周辺一帯に認められるものと思われる。調査対象地は、砂丘列の鞍部付近に位置し、遺跡とされる範囲の主要部にあたる（図24）。標高15ｍ程度を測る。

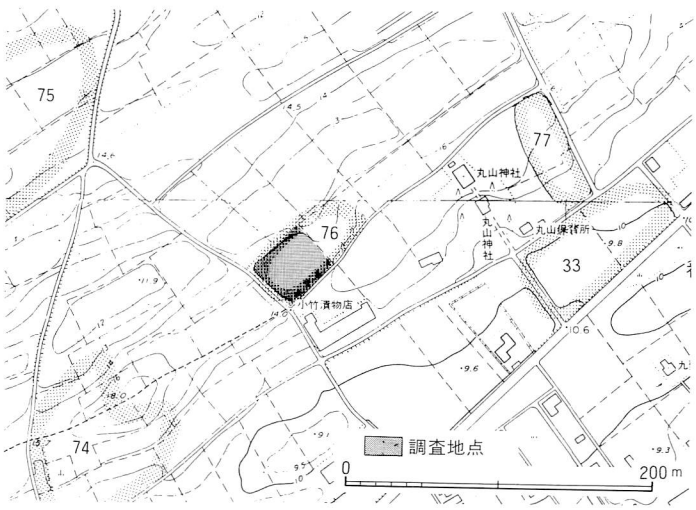


図24　調査地点とその周辺

3．調 査 結 果

調査対象地は食品加工工場に隣接する畑地である。砂丘のピークが対象地の中をほぼ東西方向に走り、稜線は西側に傾く（図24・25）。２×３ｍのトレンチ９カ所をほぼ均等に配し、実質54㎡を発掘したが、近現代陶磁が微量出土しただけで遺跡が存在する可能性を認めなかった。以下に層序について、若干の所見を記す（図26）。

第１、第２トレンチでは耕土下に黄褐色砂が出現し、砂丘表面は削平されている。対象地東側は、さらに高くなっているので、同様の状態であると予測される。第１～第７トレンチラインでは、第４・

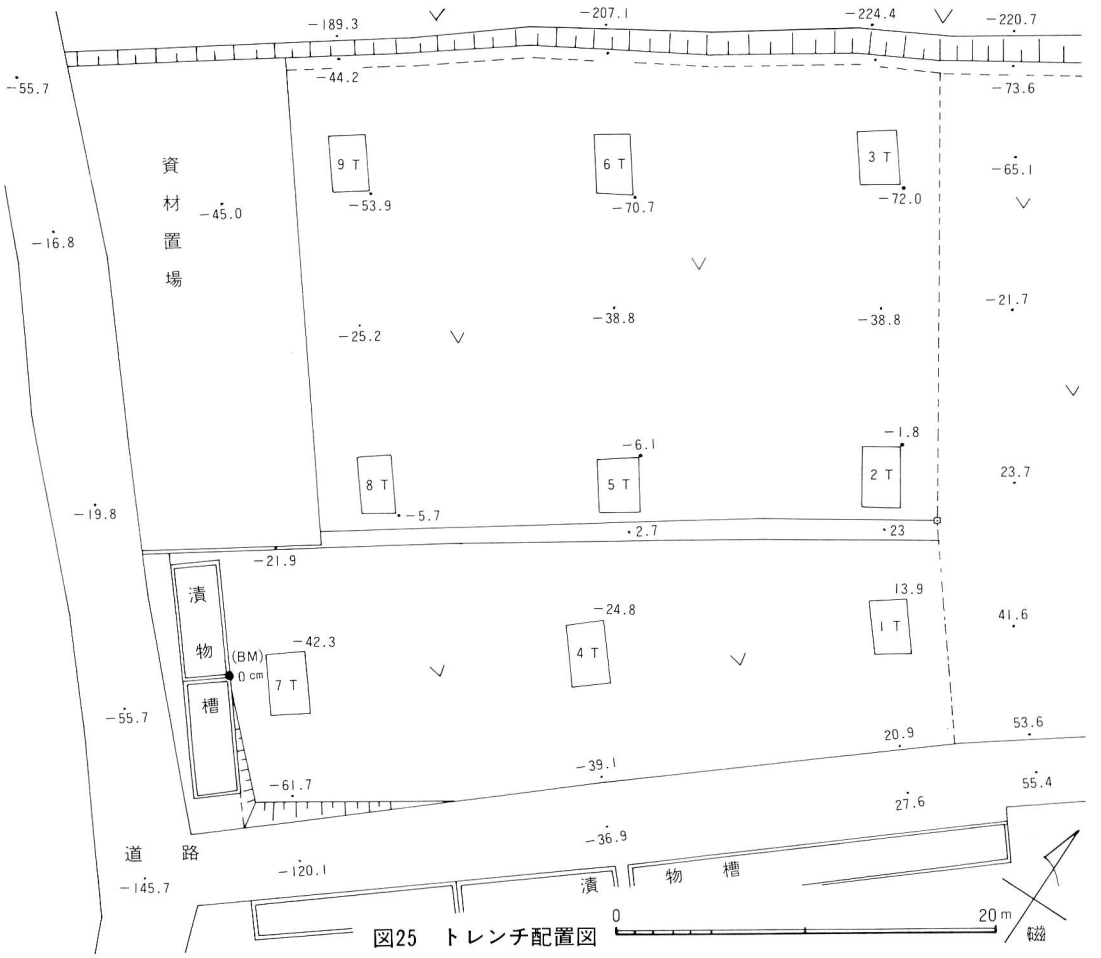


図25　トレンチ配置図

第７トレンチで砂丘基盤は急激に深くなる。第２～第８トレンチラインは変化が少ないが、第３～第９トレンチラインでは砂丘基盤が逆転する。全体に砂丘ピークの南側斜面の傾斜は強く、第４～第７トレンチでは著しいが、北側斜面の傾斜は緩い。これらの傾斜は、現地表面の傾斜よりもはるかに強い。

現耕土下に土壌改良によると思われる暗褐色土（III層）及び、底が波状を呈す深耕の跡と思われる撹乱層（II層）が概ね堆積する。Ⅰ～III層間に近世近代陶磁片が微量含まれる。以下は自然層で遺物を含まない。Ⅳ層は細粒の砂質土で薄い。Ⅴ層は腐植砂層であるⅥ層暗褐色砂層の色調の淡い部分である。Ⅵ層とは漸移的で、第５トレンチにも及ぶがそこでは明確でない。腐植砂層下の漸移層は不明確で、層としての識別は困難であるため黄褐色砂層（Ⅶ層）に含めた。Ⅳ・Ⅴ層が認められる範囲は砂丘基盤が急に深くなる第４・第７トレンチと第５トレンチの一部で、他は認められない。

このような層序関係は、赤塚地区の同じく砂丘帯内部の位置する南浦原でも観察され、窪地の溜り場などが想定されている（注４）。南浦原は新砂丘Ⅰｅ列で、ツル子Ｂと砂丘列は異なるので、砂丘上の微地形に伴う一般的な層序関係とも考えられる。

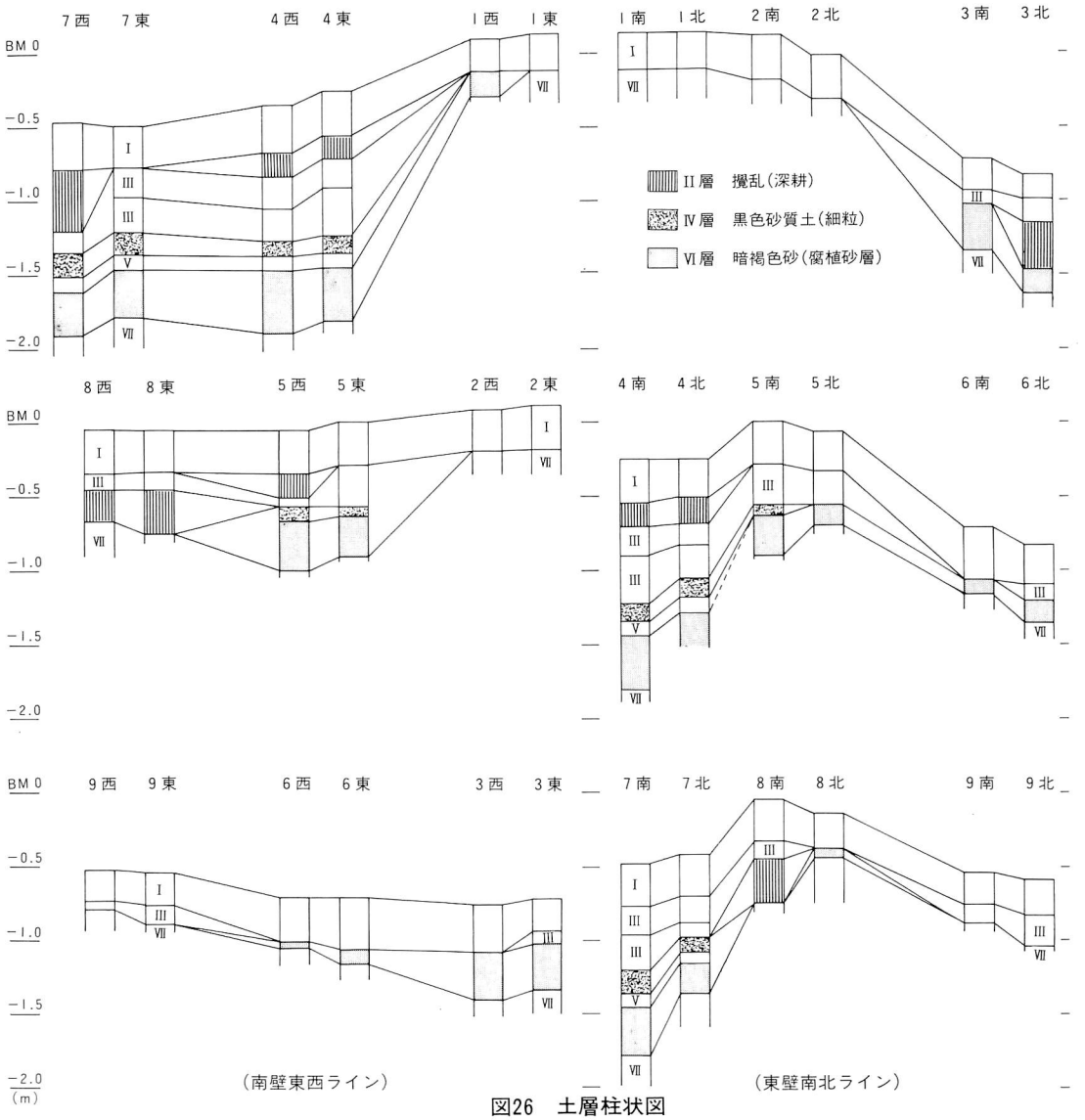


図26　土層柱状図

注)

1　坂井陽一　1982年３月（前掲）

2　大沢遺跡調査団編　『大沢遺跡　B ・B地区の調査概報』巻町・潟東村教育委員会　1981年３月

3　中野三義　『赤塚の歴史』１　1968年
赤塚中学校社会科クラブ・赤塚中学校社会科研究部　『赤塚　歴史と地理』　1968年

4　新潟市教育委員会　『新潟市南浦原遺跡範囲等確認調査報告書』　1989年１月

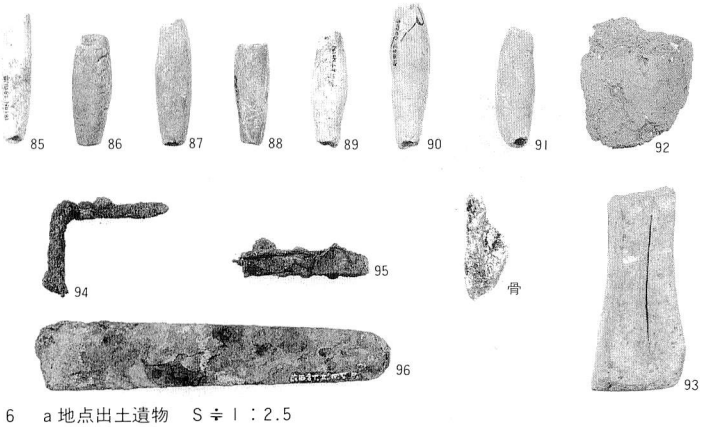
1　a地点第3トレンチ南壁・焼土状遺構

2　b地点第1トレンチ東壁

3　a地点第3トレンチ甕(114)出土状態

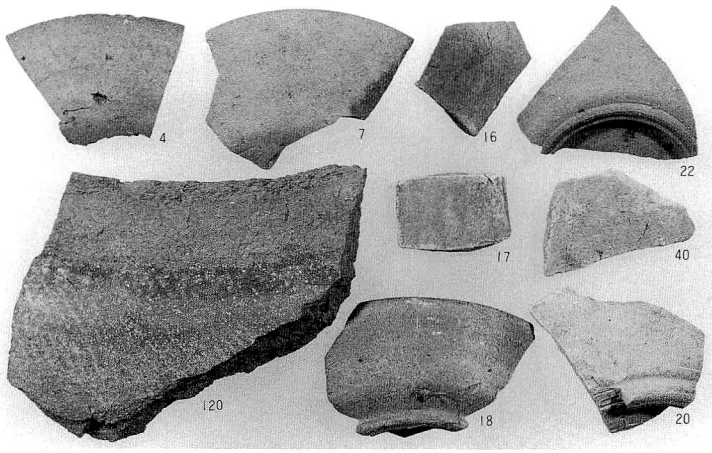
4　a地点　第9トレンチ焼土状遺構1号周辺

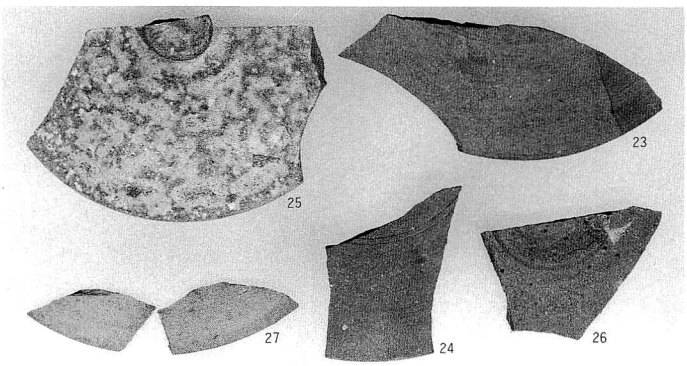
5　a地点第6トレンチ焼土状遺構と甕(56)

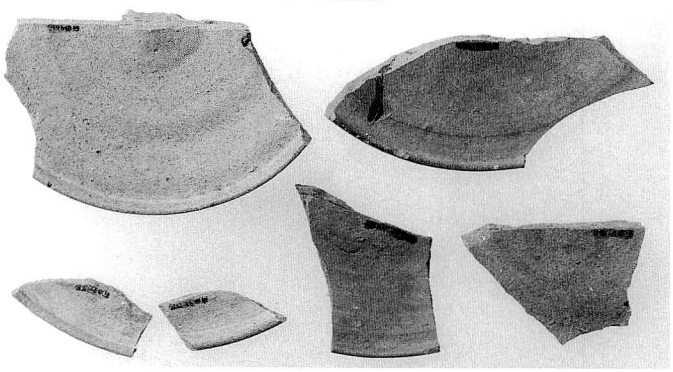


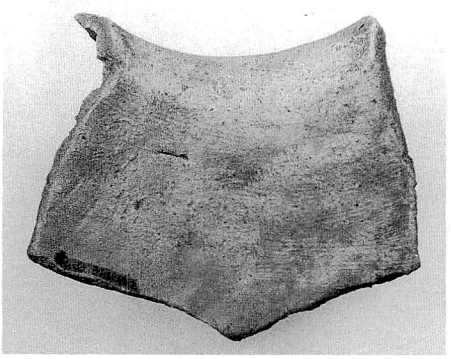
6　a地点出土遺物　S≒1：2.5

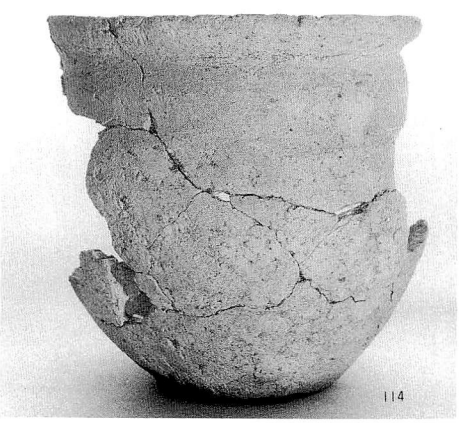
前　田　遺　跡　(1)

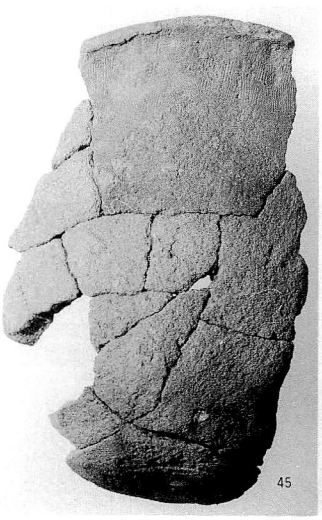


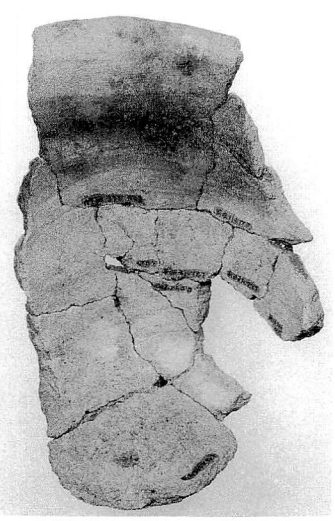






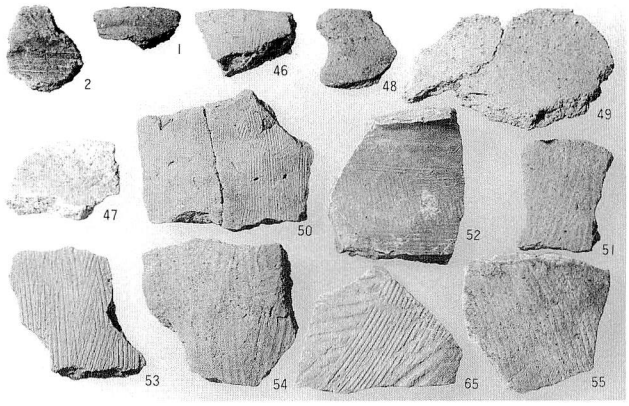


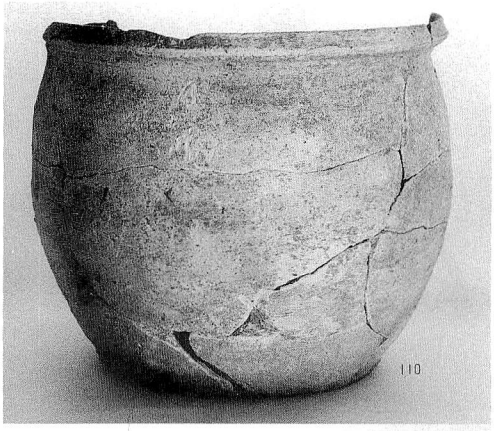


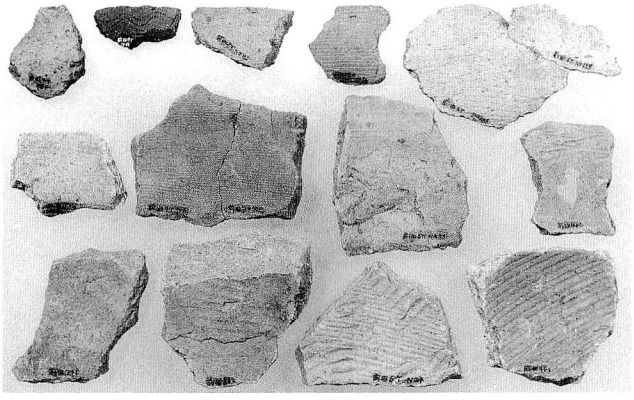


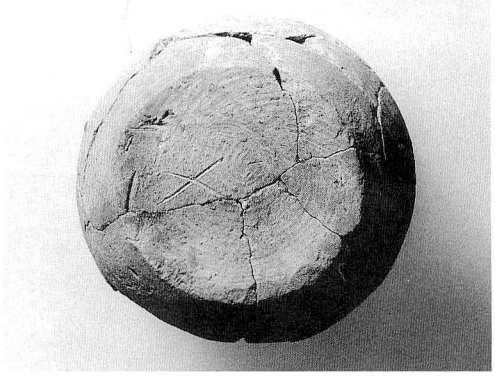
7　a 地点出土遺物　S ≒ 1 : 2.5

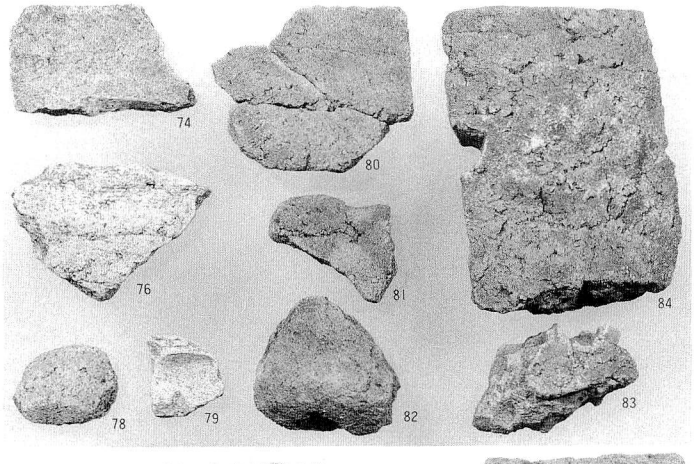
前　田　遺　跡　(2)

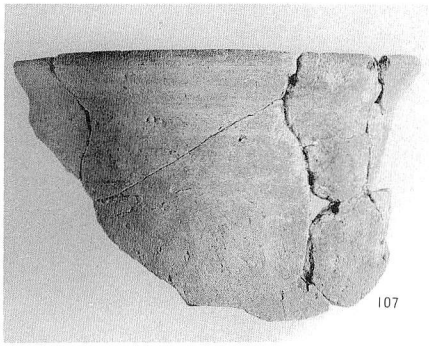


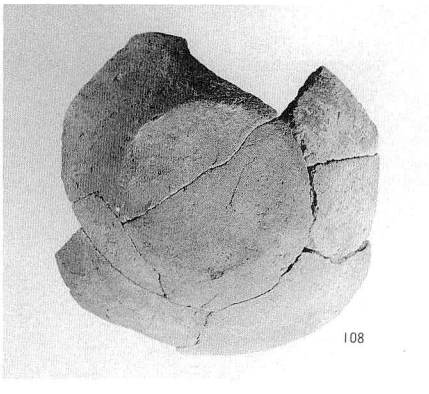


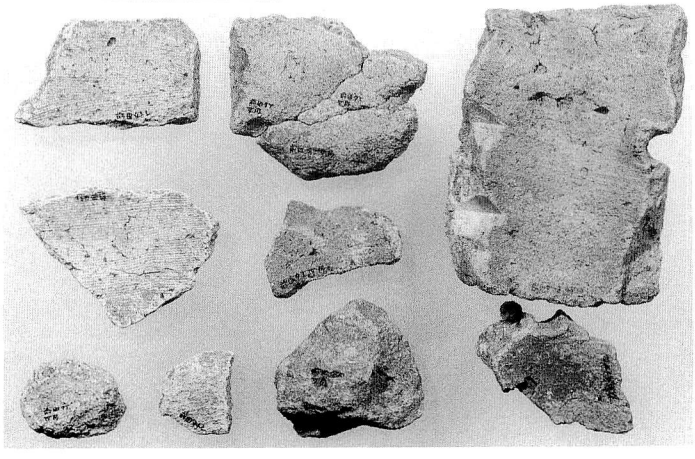










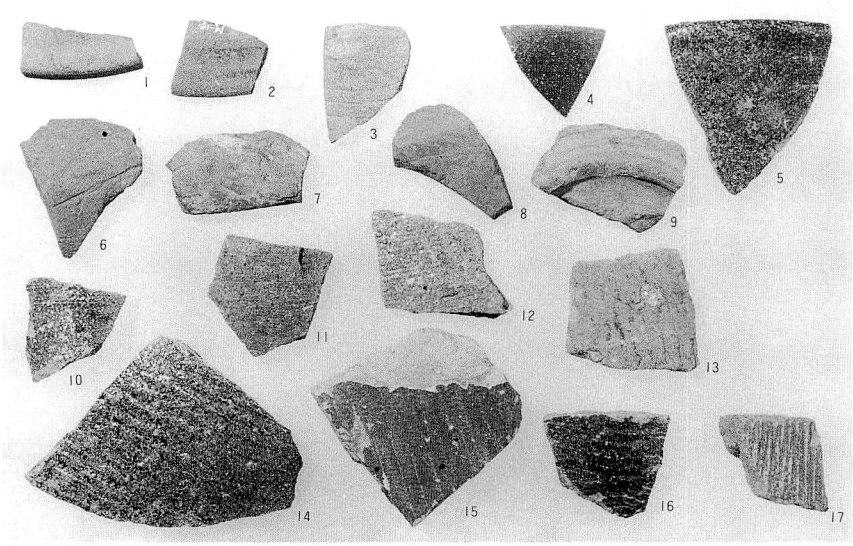


8　a 地点出土遺物　S ≒ 1 : 2.5

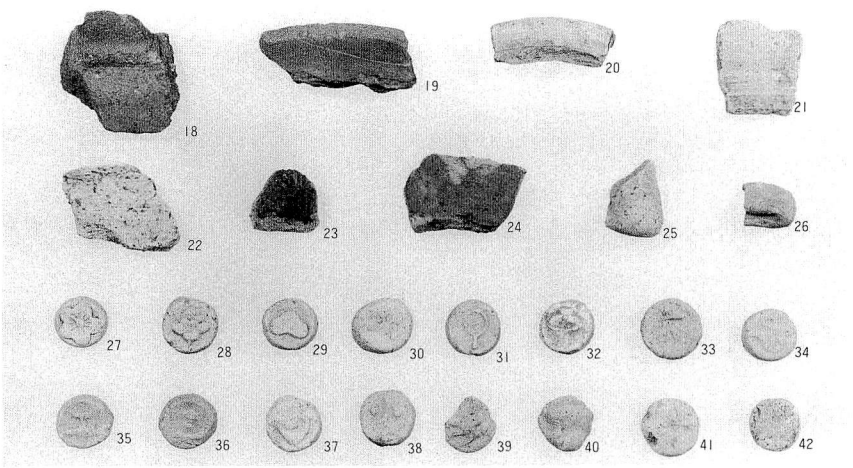
9　大藪遺跡第1トレンチ南壁

10　茗荷谷遺跡第30トレンチ西壁

11　茗荷谷遺跡第12トレンチ西壁



12　茗荷谷遺跡遺物(1)
S ≒ 1 : 2



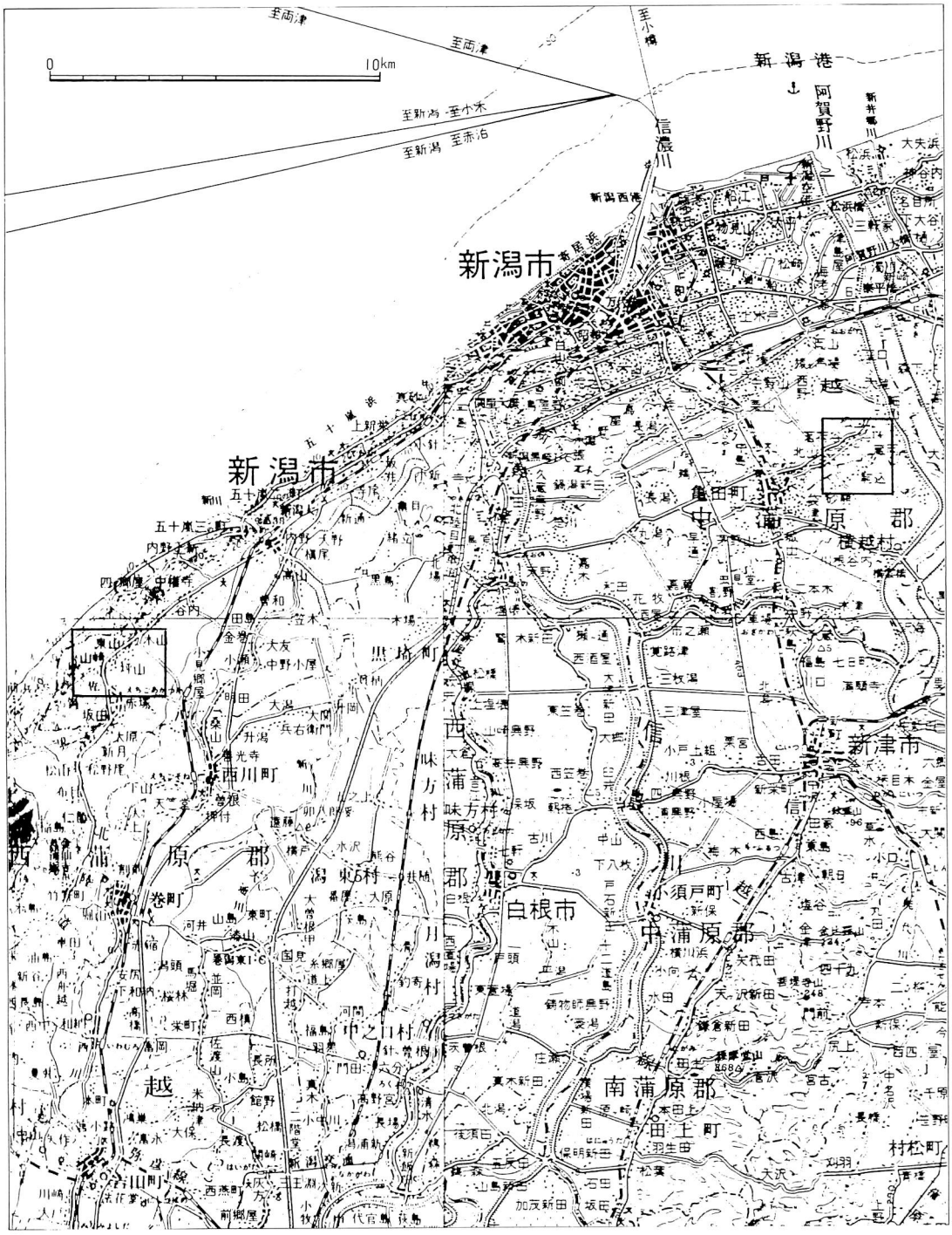
13　茗荷谷遺跡遺物(2)
S ≒ 1 : 2

14　ツル子Ｂ遺跡第４トレンチ東壁

茗荷谷遺跡・ツル子Ｂ遺跡

１９８８年度埋蔵文化財
発掘調査報告書

発行日　1989年10月５日
発行　新潟市教育委員会
新潟市一番堀通町３番地12
〒951　TEL.（025）228-1000
印刷　㈱太陽印刷所
新潟市和合町２丁目４番18号
〒950　TEL.（025）265-3101



地勢図「新潟」「長岡」(国土地理院1983年、1982年)

枠は図１・18の概略範囲